

**熊野遺跡VII** (立堀地区の調査)  
**お手長山古墳** (発掘調査/確認調査)

2007

深谷市教育委員会

熊野遺跡VII (立堀地区の調査)  
お手長山古墳(発掘調査/確認調査)

2007

深谷市教育委員会

## 序

埼玉県北部に位置する深谷市は、平成18年1月に深谷市・岡部町・川本町・花園町との合併により新たなスタートを迎えることとなりました。合併後の深谷市は、北部に利根川、南部に荒川が流れ、変化に富んだ地形や豊かな農産物があり、自然の恵み豊かな土地柄を有しています。

ここには、先人たちの残した足跡が、埋蔵文化財として今なお多く眠っております。なかでも、縄文時代晚期から弥生時代初期の土器を出土した四十坂遺跡・上敷免遺跡や、古代棟沢郡・幡羅郡の役所と推定される中宿・幡羅遺跡などは、埼玉県の原始・古代を考える上で欠かすことのできない遺跡と言えるでしょう。

深谷市では、合併以前から、こうした貴重な遺跡群を保護するために銳意努力してまいりましたが、やむなく破壊を免れない場合は、記録保存のための発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、平成元年度に民間会社の受託事業として、実施した調査の成果をまとめたものです。発掘調査では、平安時代の竪穴住居跡をはじめ、市指定史跡「お手長山古墳」の周溝確認など地域史解明の上では、大きな成果を得られたものと確信しています。本書が学術・教育関係はもとより、文化財に対する保護・保存の啓蒙・普及を図る資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成まで、多大なるご理解とご協力を賜りました関係各位・諸機関に心より御礼申し上げます。

平成19年2月

深谷市教育委員会  
教育長 猪野幸男

## 例言

1. 本書は、以下の発掘調査・確認調査の報告書である。

発掘調査 熊野遺跡（立堀地区） 調査期間 平成2年11月1日～平成2年12月27日実施

〃 お手長山古墳 〃 昭和63年5月1日～昭和63年5月15日実施

確認調査 お手長山古墳 〃 平成2年11月1日～平成2年12月27日実施

2. 熊野遺跡（立堀地区）の調査は、当初、立堀遺跡として実施したが、熊野遺跡と同一遺跡（埼玉県遺跡登録番号No.63-17）であるため本書では熊野遺跡（立堀地区）の調査として取り扱う。また、開発予定地内に隣接して深谷市指定史跡（発掘調査当時：岡部町）「お手長山古墳」が所在しており、周溝の一部が予定地内にはいることが予測されたため、併せて確認調査も実施した。

お手長山古墳の発掘調査については、昭和63年度墳丘に隣接する個人住宅建設に伴い、岡部町教育委員会が実施したものである。

3. 熊野遺跡立堀地区の発掘調査は、岡部町遺跡調査会が、新神戸電機株式会社埼玉工場の委託を受け実施した。その後、平成17年12月をもって岡部町遺跡調査会が解散したことにより、整理・報告書作成作業は、深谷市教育委員会が引き継いだ。

お手長山古墳の確認調査・発掘調査は、岡部町教育委員会が実施した。平成18年1月に深谷市・岡部町・花園町・川本町一市三町の合併に伴い、整理・報告書作成作業は深谷市教育委員会が引き継いだ。

4. 出土品の整理及び図版作成は、鳥羽政之・宮本直樹・竹野谷俊夫が行った。

5. 本書の編集・執筆は、鳥羽政之が担当した。

6. 本書に掲載した資料は、深谷市教育委員会が保管している。

7. 本報告書作成にあたり以下の機関・個人より御教示・御協力をいただいた。

埼玉県教育委員会生涯学習文化財課 勅埼玉県埋蔵文化財調査事業団 金子彰男 駒宮史朗  
坂本和俊 菅谷浩之 山崎武

## 凡例

1. 発掘調査位置図は(旧)岡部町都市計画図 1/2,500及び1/10,000を、縮小し使用した。

2. 遺物観察表の数値に（ ）のあるものは推定値、《 》のあるものは残存値を示す。

## 組織

1. 平成18年度

教育長	猪野幸男	主査	鳥羽政之
教育次長	古川国康		森田富雄
教育委員会次長	中村信雄		宮本直樹
(深谷市教育委員会岡部事務所)		臨時職員	竹野谷俊夫
所長	柳田一郎	"	黒澤 恵
所長補佐	鈴木八十子	"	佐藤由江
主査	根岸 宏	"	布施みゆき
	金井登美子		

## 目 次

序	
例言・凡例	
一目次一	
I 調査に至るまでの経緯	1
II 遺跡の地理・歴史的環境	4
(1) 地理的環境	4
(2) 歴史的環境	4
III 熊野遺跡（立堀地区）の調査	9
(1) 発掘調査地点の位置	9
(2) 調査の経過	9
(3) 発見された遺構と遺物	9
A. 壇穴住居跡	9
B. 壇穴遺構	23
C. 土壙	32
D. 沟跡	41
IV お手長山古墳の調査	49
(1) 発掘調査・確認調査の経緯	49
(2) 発掘調査・整理報告書作成の経過	49
(3) 昭和63年度の発掘調査で発見された遺構と遺物	49
(4) 平成2年度の確認調査で発見された遺構と遺物	57
(5) 発掘調査・確認調査から推定されるお手長山古墳の規模と年代	58
V まとめ	63
(1) 熊野遺跡立堀地区の調査	63
(2) お手長山古墳の発掘・確認調査	63

## ＜挿図目次＞

第1図 熊野遺跡の範囲とお手長山古墳の位置	3	第41図 17号土壙	37
第2図 熊野遺跡(立堀地区A～C地点)と お手長山古墳	3	第42図 18号土壙	37
第3図 古墳時代後期の遺跡分布(集落跡・その他)	7	第43図 19号土壙	37
第4図 古墳時代後期の遺跡分布(古墳・古墳群)	7	第44図 20号土壙	37
第5図 飛鳥～奈良／平安時代の主要遺跡分布	8	第45図 21号土壙	39
第6図 グリッド配置図	10	第46図 22号土壙	39
第7図 A区全測図	11	第47図 23号土壙	39
第8図 B区・C区全測図	13	第48図 24号土壙	39
第9図 1号堅穴住居跡	14	第49図 25号土壙	39
第10図 1号堅穴住居跡カマド	14	第50図 26号土壙	39
第11図 1号堅穴住居跡出土遺物(1)	15	第51図 27号土壙	40
第12図 1号堅穴住居跡出土遺物(2)	16	第52図 28～36号土壙	40
第13図 1号堅穴住居跡出土遺物(3)	17	第53図 土壙出土遺物	41
第14図 2号堅穴住居跡	19	第54図 1号溝	42
第15図 2号堅穴住居跡カマド	19	第55図 2号溝	43
第16図 2号堅穴住居跡遺物分布状況	20	第56図 3・4号溝	44
第17図 2号堅穴住居跡出土遺物(1)	21	第57図 5号溝	45
第18図 2号堅穴住居跡出土遺物(2)	22	第58図 6号溝	46
第19図 3号堅穴住居跡	24	第59図 7号溝	46
第20図 3号堅穴住居跡カマド	24	第60図 溝出土遺物(1)	47
第21図 3号堅穴住居跡遺物分布状況	25	第61図 溝出土遺物(2)	48
第22図 3号堅穴住居跡出土遺物(1)	26	第62図 お手長山古墳発掘調査全測図 (昭和63年度調査)	50
第23図 3号堅穴住居跡出土遺物(2)	27	第63図 お手長山古墳層断面図 ・エレベーション図	51
第24図 1号堅穴遺構	28	第64図 お手長山古墳周辺出土遺物 (昭和63年度調査)	52
第25図 2号堅穴遺構	28	第65図 お手長山古墳周溝出土遺物 (昭和63年度調査)	53
第26図 3号堅穴遺構	29	第66図 お手長山古墳周溝出土遺物 (昭和63年度調査)	54
第27図 4号堅穴遺構	29	第67図 お手長山古墳周溝出土遺物 (昭和63年度調査)	55
第28図 5号堅穴遺構	30	第68図 お手長山古墳第1トレンチ (昭和63年度調査)	57
第29図 堕穴遺構出土遺物	31	第69図 お手長山古墳第2トレンチ (昭和63年度調査)	57
第30図 1・2号土壙	33	第70図 お手長山古墳第3トレンチ (昭和63年度調査)	59
第31図 3号土壙	33	第71図 お手長山古墳第1トレンチ出土遺物 (昭和63年度調査)	60
第32図 4・5号土壙	33	第72図 お手長山古墳第2トレンチ出土遺物 (昭和63年度調査)	60
第33図 6・7号土壙	35	第73図 お手長山古墳第3トレンチ出土遺物(1) (昭和63年度調査)	61
第34図 8・9号土壙	35	第74図 お手長山古墳第3トレンチ出土遺物(2) (昭和63年度調査)	61
第35図 10・11号土壙	35	第75図 お手長山古墳墳形復元図	64
第36図 12号土壙	35		
第37図 13号土壙	36		
第38図 14号土壙	36		
第39図 15号土壙	36		
第40図 16号土壙	36		

## ＜写真図版＞

(写真図版1)	号土壙(南方より)	(写真図版4)	1号住居跡(No.12)	の親刻)
AL区全貌	2号堅穴遺構	周溝完備状況(西方より)	1号住居跡(No.16)	3号住居跡(No.9)
調査風景(南より)	3・4号堅穴遺構	・昭和63年度)	1号住居跡(No.16)	3号住居跡(No.10)
AL区西部の遺構群	5号堅穴遺構	周溝完備状況(北方より)	1号住居跡(No.14)	
1号住居跡	1～3・21号土壙	・昭和63年度)	1号住居跡(No.20)	(写真図版7)
1号住居跡カマド遺物出	4・5号土壙	第1トレンチ(南方より)	1号住居跡(No.24)	お手長山古墳周溝
土状況	6・7号土壙・2号溝	第2トレンチ(北方より)	出土遺物(No.10)	出土遺物(No.10)
2号住居跡遺物出土状況		第3トレンチ(北方より)	(写真図版6)	お手長山古墳周溝
3号住居跡遺物出土状況	(写真図版3)	第3トレンチ突出部確認	2号住居跡(No.1)	出土遺物(No.11)
3号住居跡カマド遺物出	13号土壙	状況(東方より)	2号住居跡(No.7)	お手長山古墳周溝
土状況	2号溝跡	第3トレンチ突出部確認	2号住居跡(No.8)	出土遺物(No.12)
	3・4号溝	状況(西方より)	2号住居跡(No.9)	第1トレンチ(No.8)
(写真図版2)	C区土壙群と7号溝		3号住居跡(No.1)	第2トレンチ(No.2)
1号堅穴遺構・1号溝・3	お手長山古墳現況	(写真図版5)	3号住居跡(No.2)	第2トレンチ(No.3)
号土壙(西方より)		1号住居跡(No.1)	3号住居跡(No.8)	第2トレンチ(No.6)
1号堅穴遺構・1号溝・3		1号住居跡(No.3)	3号住居跡(No.8・内面)	

## I 調査に至るまでの経緯

平成18年1月1日、深谷市、岡部町、川本町、花園町の一市三町が合併し、人口約14万6千人、総面積137.58km<sup>2</sup>の新「深谷市」が誕生した。

このうち旧岡部町域は、埋蔵文化財の宝庫として古くから知られてきた。縄文時代墓塚期の土器を出土した西谷遺跡を筆頭に、前期末～中期にかけての弥生土器を出土した四十坂遺跡、県内屈指の副葬品を有する四十塚古墳、榛沢洋・郡家と推定される熊野・中宿遺跡など、各時代を通して著名な遺跡が多く、関係する発掘調査も数多く実施されている。遺跡数は、旧岡部町域で、145箇所が確認されている。

熊野遺跡（立堀地区）の発掘調査は、平成2年度に工場建設にともなう緊急調査として岡部町遺跡調査会が実施したものである。岡部町遺跡調査会は、平成17年12月をもって解散し、その事業は深谷市教育委員会へ引き継がれることとなった。

以下に報告書刊行までの経緯を記す。

### 熊野遺跡（立堀地区）の発掘調査

熊野遺跡（県遺跡登録番号63-17）は、JR高崎線岡部駅の北方約0.9kmに位置する。遺跡は、昭和53年度の岡部西小学校建設に伴う発掘調査を嚆矢として数多く実施されている。特に平成4年度以降実施された岡中央土地区画整理事業を中心とする発掘調査は、現在まで162次を数える。

今回報告する調査地は、平成2年度当時は、立堀遺跡として調整～発掘調査が実施されているが、遺跡としての範囲は、熊野遺跡内であり、今回混乱を避けるため熊野遺跡（立堀地区）として取り扱うこととする。

また、本報告の発掘調査は、新神戸電機株式会社埼玉工場（以下事業者と記す）による工場建設に伴う緊急発掘として実施されたものである。

事業者は、平成2年9月10日付で、岡部町教育委員会に、開発予定地における埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて照会した。これに基づき教育委員会では埋蔵文化財の詳細を確認するために試掘調査を実施した。試掘調査では、工場予定地より竪穴住居跡、土壙、溝等が検出された。

この結果を受け、岡部町教育委員会では、確認された地点について開発計画予定地から除外することが望ましいが、現状変更する場合は、事前に

埋蔵文化財発掘届を提出し、記録保存のための発掘調査を実施する必要がある趣旨の回答をした。

その後、事業者及び教育委員会の協議の結果、発掘調査は、岡部町遺跡調査会に委託することになった。事業者よりの発掘届は、平成2年11月1日付けで提出され、また岡部町遺跡調査会でも、同日に発掘調査の届出を行った。

発掘調査は、平成2年11月1日から平成2年12月27日にかけて実施された。調査では、竪穴住居跡3軒、竪穴造構5基、土壙36基、溝7条、ビット等が検出された。竪穴造構としたものは、カマドの存在が明確でなく、遺物も極く少量であり、時期の比定が難しい。中世の所産であろうか。このうち、2号、3号、5号竪穴造構では、主要ビットが、壁際に1対掘られる特徴的な造構であり、周辺遺跡でも検出されていることから、本地域に特徴的な造構として注目する必要がある。

竪穴住居跡は、3軒が検出されている。いずれも東壁にカマドを設置するものであり、平安時代のものである。1号住居跡では、カマドに埴輪片が構築材として用いられており、円筒埴輪、形象埴輪が検出されている。

2号住居跡、3号住居跡は、遺物も豊富に出土した。時期は、9世紀後半である。

### お手長山古墳の発掘調査・確認調査

お手長山古墳（県遺跡登録番号63-18）は、熊野遺跡の範囲内にあり、昭和54年度に町史跡に指定されている。本古墳の発掘調査は、昭和63年度に実施されている。発掘調査は、個人住宅建設に伴うもので、岡部町教育委員会が実施した。史跡指定となっている坂丘南側の周溝部分の調査である。調査面積は487m<sup>2</sup>である。調査では、後円部の周溝約16%が検出されている。周溝からは、土師器、須恵器片が多量に出土している。以上の調査をお手長山古墳1次調査と呼称する。本古墳の確認調査は、熊野遺跡（立堀地区）の調査と併行して行った。調査期間は平成2年11月1日から平成2年12月27日にかけてである。

調査では、第1～第3トレンチを設定し、坂丘及び周溝の状況を確認した。この確認調査をお手長山古墳第2次調査と呼称する。第1次及び第2次の調査により、墳形がほぼ確定した。

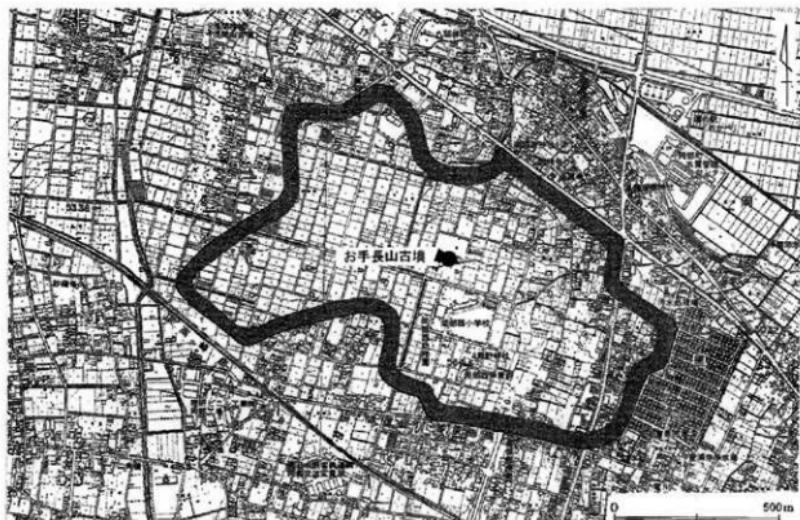
#### 整理・報告

整理・報告は、熊野遺跡（立塙地区）・お手長山古墳1～2次調査を併せて行った。

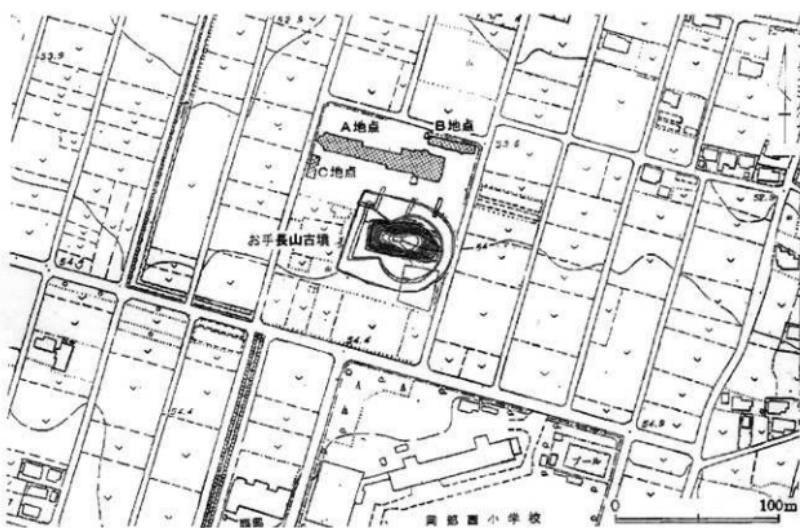
調査により検出された遺構・遺物の整理・報告書作成作業は、発掘調査実施後、諸般の事情により中断していたが、平成18年4月1日から再開した。遺物の水洗・復元・実測作業等は、旧岡部町

時代に終了していたことから、平成18年4月以降、図面の整理作業、原稿執筆作業を中心に行った。

図面の整理を平成18年4月～8月、トレース作業を9～10月、原稿執筆・図版作成等を10月～12月、印刷・製本作業は、平成19年1月～2月にかけて行った。報告書刊行日は、平成19年2月28日である。



第1図 熊野遺跡の範囲とお手長山古墳の位置



第2図 熊野遺跡(立堀地区 A～C 地点)とお手長山古墳

## II 遺跡の地理・歴史的環境

### (1) 地理的環境

熊野遺跡（立堀地区）・お手長山古墳は、調査時点では岡部町大字岡に位置していたが、平成18年1月1日に深谷市・岡部町・川本町・花園町の一市三町が合併し、新「深谷市」がスタートした。ここでは、合併後深谷市の地理的環境を概観する。

荒川以北の深谷市域は、地形的には櫛挽台地・本庄台地・妻沼低地に大きく区分される。

櫛挽台地は、荒川左岸に広がる台地であり、荒川により形成された扇状地形を有する。西部は、藤治川・針ヶ谷堀周辺で本庄台地、山崎山丘陵と区分され、北端部は、福川右岸付近で妻沼低地と接する。妻沼低地と櫛挽台地の境界付近を東流する福川は、櫛挽台地扇端部の豊富な湧水を集めながら、深谷市北部域の農業用水として現在も重要な位置を占めている。

櫛挽台地の標高は、扇頂部にあたる寄居付近で100m程、扇端部は35～50m程である。また、当台地は、荒川の流路変更により形成された段丘が発達し、その形成過程により、櫛挽面・寄居面に大別される。

櫛挽面は武藏野面に対比され、岡部町・深谷市東半をのせる。台地上には、藤治川・針ヶ谷堀川・西川・上唐沢川・押切川・下唐沢川等の中河川が北流する。これらの河川は、扇尖部から扇端部付近の湧水に端を発し、台地を北流する。一見平坦に見える台地上も、現存する中小河川や、他の埋没谷による緩やかな起伏があり、その景観は、櫛で挽いた如くである。

寄居面は、櫛挽面以降に形成された段丘面である。櫛挽面とは、寄居高校付近から深谷市下郷、境、折之口、上宿へと連なる崖線で区分される。

この寄居面では、ローム層が比較的厚く堆積する段丘面と、その下位にありローム層の堆積が薄いか認められない段丘面に区分される。前者は御威稜ヶ原面として別称される。境界の崖線付近では湧水が随所に認められる。さらに、寄居面形成以降、川本明戸付近を扇頂とする荒川新扇状地が形成される。御威稜ヶ原面との境界付近及び扇端部付近は、熊谷市域の重要な遺跡が集中する。

本庄台地に相当する地域は、深谷市西端の藤治川・針ヶ谷堀以西の地域（旧岡部町棲澤地区）である。台地上には、見駒川（小山川）・志戸川、女

堀等の中小河川があり、この河川の流域は、沖積地が形成されている。

妻沼低地は、利根川及びその支流により形成された広大な低地帯である。南方で本庄台地及び櫛挽台地と接する。旧岡部町北部・旧深谷市北部が該当し、低地内では中州的な微高地があり、遺跡の立地にも大きく関連している。

この他、櫛挽台地と本庄台地の境界付近に山崎山（標高約117m）・諏訪山丘陵（標高約109m）、櫛挽面に仙元山丘陵（標高約98m）と呼称される残丘上の小丘陵が存在する。

一方、荒川以南は、旧川本町域南部が該当する。当地域の南半は、江南台地上にのる。江南台地も荒川の流路変更により形成された段丘面であり、扇状地形を有する。

扇頂部付近の寄居町木持付近では標高140m、扇端部の熊谷市原新田付近では標高45mを測る。この段丘面は、江南面と呼称され、櫛挽面以前に形成されたものである。江南面の下段には寄居面が存在する。この段丘面は、櫛挽台地側のそれと対応する。江南台地上から下段の段丘面（寄居面）にかけて、荒川の支流である吉野川が東流及び北流し、その流域には狭小であるが沖積低地が形成されている。

#### （引用・参考文献）

- 籠瀬良明 1975 「自然堤防」 古今書院  
川本町 1991 「川本町史一通史編」  
埼玉県 1978 「埼玉県市町村誌第14巻一岡部町」  
埼玉県 1986 「埼玉県史別編3－自然」  
深谷市 1969 「深谷市史」  
〃 1980 「深谷市史一追補編」  
寄居町 1986 「寄居町史一通史編」

### (2) 歴史的環境

深谷市域における弥生・古墳時代以降の遺跡分布及び河川・丘陵・台地等の地理的条件を勘案すると複数のグループингが可能である（註1）。

このうち、熊野遺跡（立堀地区）・お手長山古墳はI地域にあたる（第5～7図）。当地域は、櫛挽台地北縁から妻沼低地（小山川右岸）にかけての範囲であり、中央部を福川が北流する。以下ではI地域に所在する古墳時代以降の遺跡群の動向について触れる。

古墳時代における櫛挽台地北縁部は、重要な古墳・古墳群が数多く調査されている。四十塚遺跡は弥生時代前中期～中期にかけての遺構・遺物群が検出された遺跡として著名であるが、平成2年度に実施された発掘調査では、五領～和泉期にかけての墳墓群が検出された(註2)。当遺跡は四十塚古墳群の範囲にあり、当古墳群における調査例としては最古段階に位置づけられ、現状では古墳群開始の起点となるものである。その後、5世紀末頃には、横薙板紙留短甲・五鉢付鏡板等の出土で知られる四十塚古墳が成立する(註3)。

当古墳は、現在のところ榛沢郡域最有力の古墳と推定され、郡域において福川上流域の優位性が顕著となる時期である。四十塚古墳群中には、その後6世紀後半段階で寅稲荷塚古墳が築造され

(註4)、郡域最有力の古墳群としての位置が継続していることが明確となっている。

また、寅稲荷塚古墳に後続する有力墳として、お手長山古墳が築造される。お手長山古墳は昭和63年度、平成2年度に周溝の調査が実施されており(本報告分)墳形がほぼ確定している。全長49.5mの帆立貝式古墳であり、現状では埴輪が伴わないと考えている。寅稲荷塚古墳とは近接するものの四十塚古墳群の範囲からは逸脱しており、この点は、在地での新たな関係が成立したことによるものであろう。

その後、約400m東方に内出八幡塚古墳(円墳33m)が築造される。当古墳は周溝の調査等が継続的に実施されており、墳形及び規模が確定している。また、古墳削平(昭和8年)の際の詳細な記録(註5)から石室・出土遺物の状況等が明確となっている。当古墳の時期については7世紀前半代と考えられる。

愛宕山古墳は、内出八幡塚古墳の東北約1.2kmに位置する。発掘調査等は実施されていないが、現在の墳形から終末期方墳と考えられる(註6)。

規模は一辺37mである。また、普济寺～岡部地区に所在する上原古墳群では、終末期古墳2基の調査例がある(註7)。

四十塚古墳→寅稲荷塚古墳→お手長山古墳→内出八幡塚古墳→愛宕山古墳と有力古墳が継続的に築造される状況から櫛挽台地北縁部は、古墳時代在地首長層の伝統的勢力基盤であったことが明確な地域である。

この他、1地域内の古墳群として上敷免古墳群、

戸森古墳群、普濟寺古墳群等がある。上敷免古墳群では、明治42～43年に円筒・人物埴輪・土師器・須恵器等が出土している(註8)。この他、昭和60年～62年にかけて、国道17号線深谷バイパス建設予定地の発掘調査が実施され、古墳時代前期の方形周溝墓及び古墳跡が検出されている。古墳跡は径44m(推定)の大型円墳である(註9)。戸森古墳群中に所在する戸森松原遺跡では、和泉期後半～鬼高期内にかけての墳墓群13基が検出された。墳丘は残存せず、周溝のみの調査であったが方形→円形へと墳形が推移する状況が確認されている(註10)。普濟寺古墳群は、台地末端に所在する。大正10年に馬形埴輪等が出土した(註11)。この他、堂山古墳は、径31mと推定される円墳であり勾玉等の出土が伝えられている(註12)。

また、榛沢郡正倉に比定される中宿遺跡からも下層より方墳跡が調査されている。規模は一辺が14m程であり、出土土器は和泉期前半に位置づけられる(註13)。

古墳時代の集落跡の調査例も近年増加しつつある。古墳時代前～中期の集落跡として戸森松原遺跡、起会遺跡(註14)、矢島南遺跡(註15)、深谷町遺跡(註16)、森下遺跡(註17)、岡部条里遺跡(註18)、砂田前遺跡(註19)、戸森前森遺跡(註20)、上敷免遺跡等がある。これらの集落は、比較的小規模なものであるが、上敷免、砂田前、岡部条里遺跡などの集落跡は、後期初頭頃にいたり規模を拡大する。また、深谷市高畠付近は、土師器片が広域に採集でき、大規模な集落遺跡の存在が予測される(註21)。

古墳後期の集落跡として、前代から継続するものの他、上宿遺跡(註22)、中宿遺跡、町田西遺跡(註23)等があげられる。

飛鳥時代後半(7世紀後半)には、櫛挽台地上に熊野遺跡が成立する。当遺跡は、初期評家と推定される遺跡であり、成立当初から大規模な掘立柱住物群や石組井戸、連房式鍛冶工房、道路遺構など築出した遺構群が成立し、畿内土師器が多量に搬入されるなど大きな変化がなされた時期である。畿内土師器の年代観は7世紀第3四半期であり、熊野遺跡の成立時期もこの頃である。熊野遺跡では、7世紀末～8世紀初頭には竪穴住居跡主体の集落遺跡へと変化する。この頃の評家は、中宿遺跡倉庫群南方付近へと移転するものと考えられるが、郡府院の位置については未確

定である（註24）。

中宿遺跡倉庫群は、概ね4段階の変遷を遂げ、最終段階には、すべて礎石建物となる。倉庫群の終焉の時期は明確ではないが、10世紀後半段階には倉庫群内に集落跡が形成されることから、この時期には確実に廃絶されたものと考えられる。倉庫群が最も整備される時期は、8世紀後半頃であろう。

中宿遺跡に隣接する岡庵寺（註25）は、軒丸瓦の年代観から8世紀前半頃の創建と考えられる。遺構としては、掘込地業を伴う礎石建物跡が検出されているが、伽藍配置は不明である。

熊野・中宿・岡庵寺は、樹垣台地上にあり、棲沢評・郡家及びその周辺を象徴する官衙・寺院遺跡であるが、これらを取り巻くように集落遺跡も展開する。白山（註26）・新田（註27）・上宿・塚東遺跡（註28）などが、その代表的遺跡である。

また、棲沢評・郡家関連遺跡から1.2km東方に位置する菅原遺跡（註29）では、平安時代の集落跡の他、10世紀代と推定される半地下式堅型炉が構築され、鉄生産の拠点的位置を占める。この時期、官衙の衰退、終焉と呼応するように、郡内各所に鉄生産の拠点の位置を占める遺跡が形成されることは、古代棲沢郡の大きな特徴のひとつである。

（註）

- 1 詳細については深谷市教育委員会2006「下道南遺跡」を参照されたい。
- 2 岡部町遺跡調査会2003「四十坂遺跡」
- 3 岡部町教育委員会2006「四十塚古墳の研究」
- 4 埼玉県立本庄高等学校考古学部1975「いぶき 8・9合併号」
- 5 岡部町教育委員会2001「町内遺跡II」
- 6 深谷市教育委員会2006「岡部町史-原始・古代資料編」
- 7 埼玉県立本庄高等学校考古学部1975「いぶき 8・9合併号」
- 8 深谷市教育委員会2006「岡部町史-原始・古代資料編」
- 9 埼玉県埋蔵文化財調査事業団1997「上敷免遺跡」
- 10 埼玉県埋蔵文化財調査事業団1995「森下・戸森松原・起会」
- 11 深谷市教育委員会2006「岡部町史-原始・古代資料編」
- 12 "
- 13 岡部町教育委員会1995「中宿遺跡-推定棲沢郡正倉跡の調査」  
岡部町遺跡調査会1997「中宿遺跡II」  
岡部町教育委員会1999「中宿遺跡III」
- 14 註10と同じ。
- 15 埼玉県埋蔵文化財調査事業団1994「矢島南遺跡」
- 16 深谷市教育委員会1985「深谷町遺跡」
- 17 註10と同じ。
- 18 埼玉県埋蔵文化財調査事業団1999「岡部条里／戸森前」
- 19 埼玉県埋蔵文化財調査事業団1991「穂諾・砂田前遺跡」

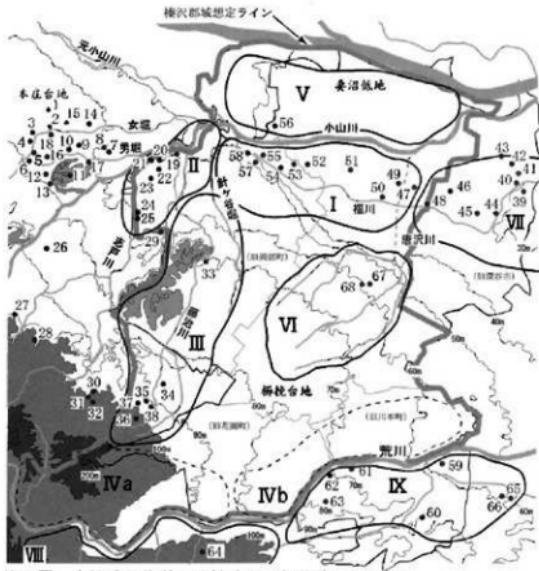
さらに、菅原遺跡より、東方3kmにある花小路遺跡（註30）も台地末端に位置する遺跡であるが、9世紀後半～10世紀にかけて堅穴住居跡、仏堂施設と推定される掘立柱建物跡等が検出されており、菅原遺跡例とあわせて、在地社会の構造的変化を象徴する現象と把握したい。

一方、妻沼低地上では、中宿遺跡直下の滝下遺跡において、從来の河川を大規模に掘削したと推定される河川跡（滝下河川跡）が検出されている（註31）。掘削時期は7世紀末～8世紀初頭である。河川跡からの出土遺物として木製農具、祭祀具、鉄滓、土器類・須恵器等が検出されている。

また、岡部条里遺跡では、7世紀後半頃には、正方位より30度ほど触れる斜行溝が掘削されており、8世紀中頃には、条里型地割が確認できる。8世紀後半段階には条里型地割内に居宅跡が確認できる。

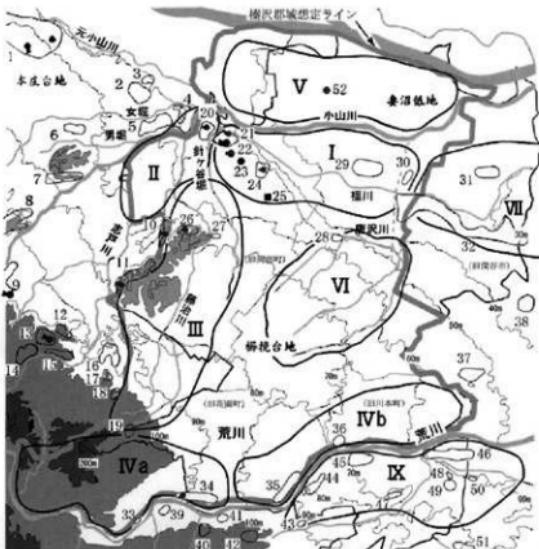
この他、矢島南遺跡、起会遺跡、戸森松原遺跡、上敷免遺跡、上敷免森下遺跡（註32）等で、当該期の集落跡、条里型地割が検出されている。

- 20 埼玉県埋蔵文化財調査事業団1997「砂田前遺跡」  
埼玉県埋蔵文化財調査事業団1999「岡部条里／戸森前」
- 21 平成18年度深谷市教育委員会にて調査。
- 22 岡部町遺跡調査会2005「上宿遺跡A地点」  
岡部町遺跡調査会2006「上宿遺跡B地点」  
岡部町遺跡調査会1998「上宿遺跡F地点」
- 23 深谷市教育委員会1995「町田西遺跡」
- 24 岡部町遺跡調査会2000「熊野遺跡I」  
岡部町遺跡調査会2003「熊野遺跡II」  
岡部町教育委員会2004「熊野遺跡III」  
岡部町遺跡調査会2004「熊野遺跡IV」  
深谷市教育委員会2006「熊野遺跡V」
- 25 深谷市教育委員会2006「岡部町史-原始・古代資料編」
- 26 埼玉県教育委員会2005「町内遺跡VI」  
埼玉県教育委員会1989「白山遺跡」  
岡部町教育委員会2004「町内遺跡VI」
- 27 深谷市教育委員会2006「白山遺跡II」  
岡部町遺跡調査会1991「新田遺跡」  
岡部町遺跡調査会1999「新田遺跡II」  
埼玉県埋蔵文化財調査事業団2000「熊野・新田」
- 28 岡部町遺跡調査会2004「塚東遺跡-第1次調査」  
29 埼玉県埋蔵文化財調査事業団1995「菅原遺跡」
- 30 平成18年度深谷市教育委員会にて調査実施。
- 31 埼玉県埋蔵文化財調査事業団1993「原ヶ谷戸／滝下」  
岡部町教育委員会1997「滝下遺跡」
- 32 深谷市教育委員会2005「森下遺跡」



第3図 古墳時代後期の遺跡分布（集落跡・その他）

- 1 比嘉路遺跡
- 2 西宮遺跡・四方田  
桑原遺跡
- 3 地神・猪瀬遺跡
- 4 今井木田遺跡
- 5 長谷川遺跡
- 6 川越遺跡
- 7 久木山遺跡
- 8 久木山遺跡
- 9 七色山遺跡
- 10 下田遺跡
- 11 大久保山遺跡
- 12 施玉山遺跡
- 13 犀谷山遺跡
- 14 岩出山遺跡
- 15 鶴原遺跡
- 16 四方山遺跡
- 17 東行山遺跡
- 18 久坂田遺跡
- 19 六反田遺跡
- 20 稲荷山遺跡
- 21 大谷遺跡
- 22 西谷山遺跡
- 23 丹波山遺跡
- 24 石狩山遺跡
- 25 地神山遺跡
- 26 猪の口遺跡
- 27 ミヤヒロ古墳遺跡
- 28 宇佐山遺跡
- 29 白久山遺跡
- 30 落合山遺跡
- 31 金糞山遺跡
- 32 春日山遺跡
- 33 桜井山遺跡
- 34 南森山遺跡
- 35 甫子前条遺跡
- 36 甫子北沢遺跡
- 37 甫子造跡
- 38 出羽森遺跡
- 39 前瀬遺跡
- 40 朝日遺跡
- 41 城北遺跡
- 42 鶴山遺跡
- 43 野田遺跡
- 44 東川遺跡
- 45 宮ヶ谷遺跡
- 46 新屋敷遺跡/本郷前  
遺跡
- 47 佐多古墳跡
- 48 丸山遺跡
- 49 森下遺跡
- 50 戸森山遺跡
- 51 駒島遺跡
- 52 美島南遺跡
- 53 朝倉遺跡
- 54 向原桑原遺跡
- 55 町田西遺跡
- 56 町田西遺跡
- 57 丹波山遺跡
- 58 上山道跡
- 59 鹿島遺跡
- 60 離原東遺跡
- 61 川瀬遺跡
- 62 知意・如意南  
山遺跡
- 63 丹山遺跡
- 64 むじな遺跡
- 65 宮下遺跡
- 66 丹波山遺跡
- 67 黒山遺跡
- 68 黒山西遺跡



第4図 古墳時代後期の遺跡分布（古墳・古墳群）

- 1 桶・小森古墳群
- 2 収合古墳群
- 3 御堂山古墳群
- 4 東五十子遺跡  
〔古墳〕
- 5 西玉子古墳群
- 6 重富山古墳群
- 7 家本山古墳群
- 8 生野山古墳群
- 9 佐大町古墳群
- 10 丹波山古墳群
- 11 間山山古墳群
- 12 中尾山古墳群
- 13 大仏山古墳群
- 14 白石山古墳群
- 15 羽根山古墳群
- 16 香門山古墳群
- 17 猪俣山古墳群
- 18 落尻山古墳群
- 19 佐野山古墳群
- 20 第一猪戸古墳群
- 21 第二猪戸古墳群
- 22 お手置山古墳
- 23 内田山古墳群
- 24 白山古墳群
- 25 愛宕山古墳
- 26 千光寺古墳群
- 27 釜口山古墳群
- 28 長谷山古墳群
- 29 戸森山古墳群
- 30 上野古古墳群
- 31 上塘山古墳群
- 32 木之谷古墳群
- 33 桶ノ木古墳群
- 34 小瀬山古墳群
- 35 茂田山古墳群
- 36 見田山古墳群
- 37 丹波山古墳群
- 38 五井山古墳群
- 39 立・栗山古墳群
- 40 上原山古墳群
- 41 小瀬山古墳群
- 42 伊賀山古墳群
- 43 赤浜山古墳群
- 44 菊崎山古墳群
- 45 駒場山古墳群
- 46 駒場山古墳群
- 47 上大河山古墳群
- 48 平方山古墳群
- 49 清水山古墳群
- 50 桶・舟古墳群
- 51 枝井山古墳群
- 52 下野野古墳群

(注)  
櫻沢郡域を示すラインは近世の郡域を参照したものである。  
古代では、自然条件その他の関係で、異なる部分があったと推定される。特に、利根川流域は、利根川・烏川等の乱流により近世以前の国境(郡境)は大きく変動している。したがって地域区分Vの範囲は流动的である。



第5図 飛鳥～奈良/平安時代の主要遺跡分布

(注1)

桜沢都域を示すラインは近世の都域を参照したものである。

古代では、自然条件その他の関係で、異なる部分があったと推定される。特に、利根川流域は、利根川・鳥川等の乱流により近世以前の国模(郡界)は大きく変動している。したがって地域区分Vの範囲は流动的である。

(注2)

第13図のうち▲は末尾宿跡支群の位置を、○付数字は支群番号を示す。

◎は、桜沢支群を意味する。

### III 熊野遺跡（立堀地区）の調査

#### （1）発掘調査地点の位置

発掘調査地点は、深谷市岡2003番地である。小字名は立堀であり、このことから当初は立堀遺跡として調査を実施した。ただし、本調査区は、熊野遺跡の範囲にあたり埼玉県遺跡登録番号は、No.63-17であることから、今回の報告では、熊野遺跡「立堀地区」と呼称することとする。熊野遺跡では、数多くの調査が実施されており、本調査区の南部には、昭和52～53年度調査地点（岡部西小学校敷地内）が、東部には、岡中央土地区画整理事業地があり、多種・多様な遺構・遺物が検出されている。

また、発掘調査地点に隣接して、深谷市指定史跡「お手長山古墳」が存在しており、本調査と併行して確認調査が実施されている。周溝が確認されており、昭和63年度の個人住宅建設に伴う発掘調査成果と併せ墳形が確定している。

#### （2）調査の経過

発掘調査は、平成2年11月1日から12月27日にかけて実施した。調査地点は、A、B、Cの3地点ある。A地点は850m<sup>2</sup>、B地点は145m<sup>2</sup>、C地点は75m<sup>2</sup>の面積を有す。発掘調査地点の分割は、当初の開発予定地が3箇所に分散していることによる。

調査地周辺は、砂利敷の簡易舗装を行う計画であり、遺構・包含層には影響を及ぼさない工事であると判断し、調査対象から除外した。また、調査対象地域とはならないが、申請地域内には市指定文化財（当時は町指定）「お手長山古墳」の周溝が存在することが予想されたことから、この確認調査についても事業者の了承を得、併せて実施することとなった。周溝確認のためのトレーニチは3ヶ所に設定した。調査は、まず立堀地区A～C地点の表土除去作業から開始した。表土除去にはバックホー0.4を使用した。遺構確認面は、地表から30～50cm下層のソフトローム層とし、引き続きお手長山古墳周溝のトレーニチについてもバックホーによる掘り下げを行った。

表土除去及びトレーニチ掘削後、遺構確認作業を行った。A～C地点及びトレーニチの遺構確認作業は、3日ほどの期間を要し終了した。

この結果、竪穴住居跡3軒、竪穴遺構5基、土

壇37基、溝7条、ピット等が検出された。

これらの遺構については、断面図及び遺構分布図作成と併行させながら掘り下げを行い、11月末には、終了した。その後、遺構図の作成、カマドの掘り下げ等を行い、12月27日には、発掘作業の全行程が終了した。

#### （3）発見された遺構と遺物

##### A. 竪穴住居跡

本調査では、3軒が検出されている。出土遺物はいざれも豊富である。住居跡の時期については、9世紀後半～10世紀前半代と思われる。

##### 【1号住居跡】

A区西端のB～C-2グリッドに位置する。長軸は4.02m、短軸は3.72mである。主軸方位は、N-98°-Eである。確認面から床面までの深さは12cmである。床面は若干の間凸がある。床にはピットが検出されているが、明確な主柱穴は確認できなかった。5号溝との切合関係を有しております本遺構が古いことが判明している。

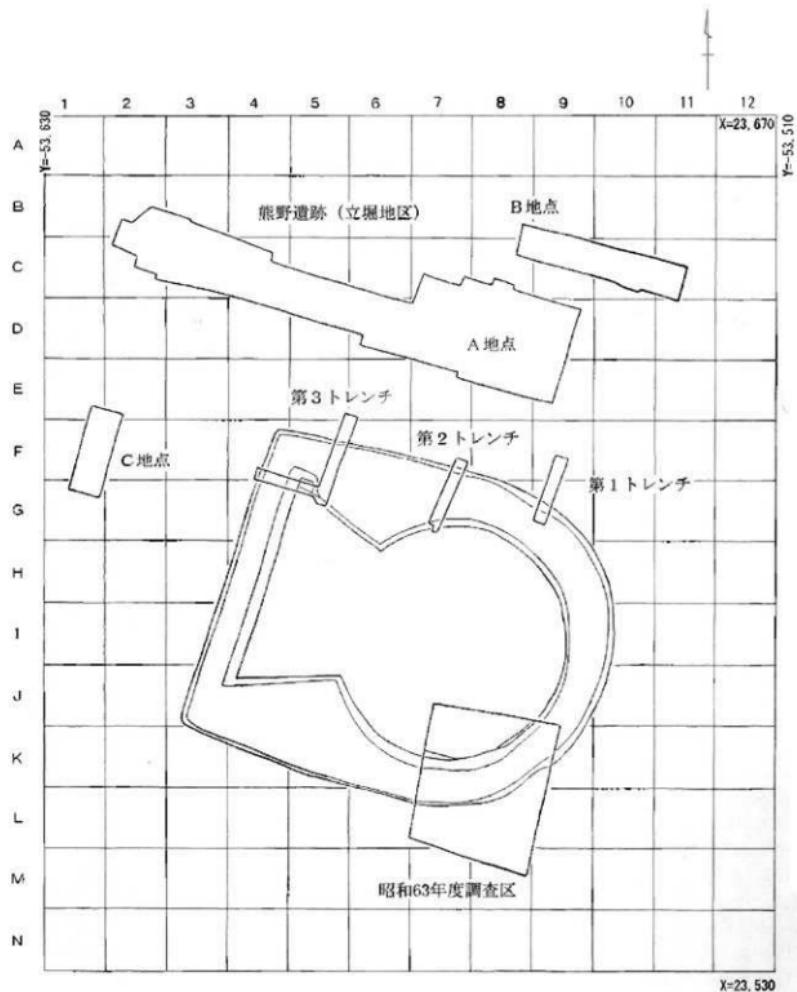
カマドは、東壁北よりを1.2m掘り込んで構築されている。袖については、確認できなかった。カマド構築材として埴輪片が多量に使用されていた。出土した土器類は、時期の幅が大きく、年代比定の明確な根拠を欠くが、主要な遺物から9世紀末～羽釜出現期の10世紀前半頃と推定する。

##### 【2号住居跡】

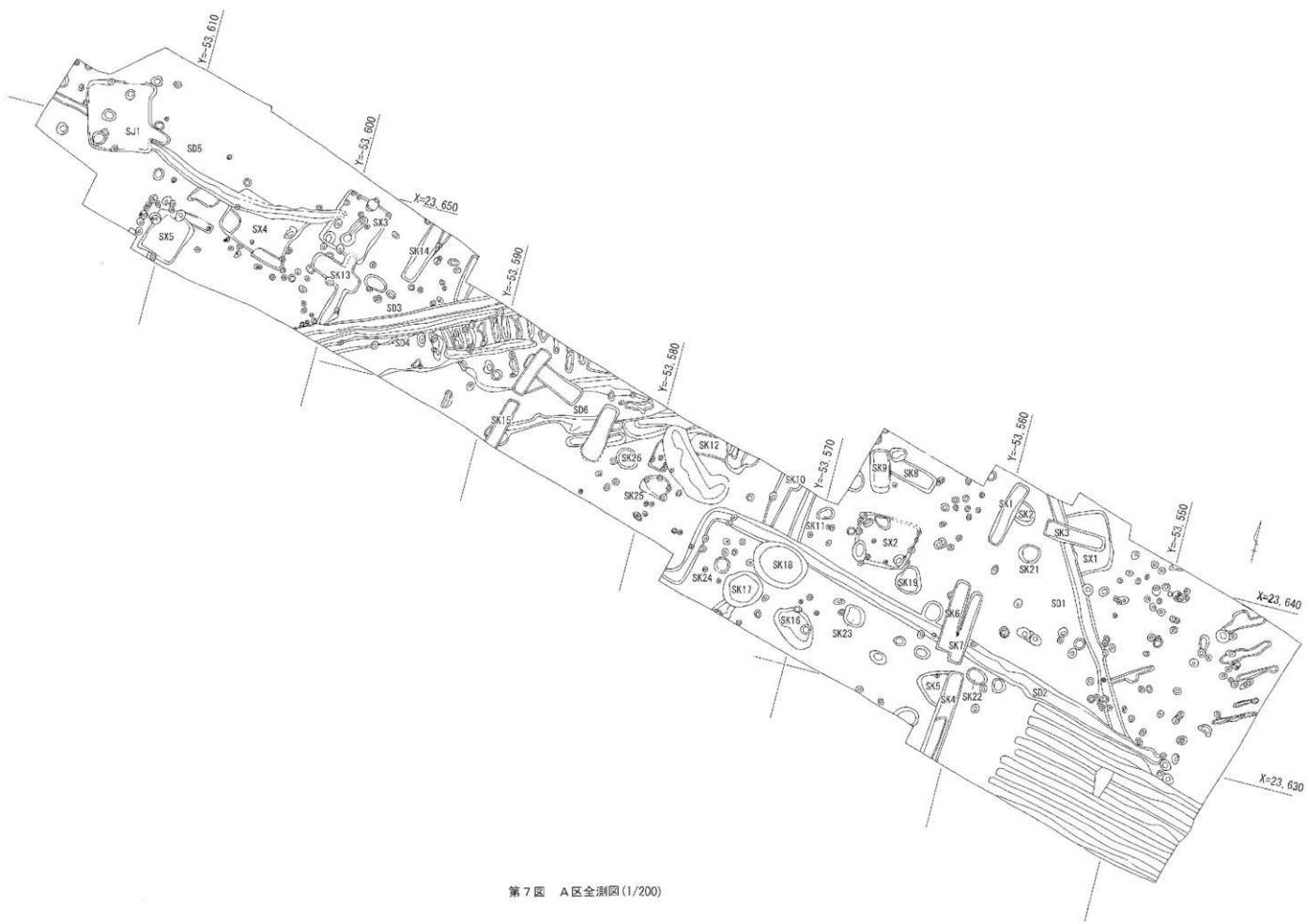
B区中央のC-10グリッドに位置する。長軸は3.42m、短軸は2.34mである。主軸方位は、N-70°-Eである。確認面から床面までの深さは16～30cmである。床面は、ほぼ平坦である。明瞭な主柱穴は確認できなかったが、しっかりととした壁溝が廻りを巡る。他の遺構との切合関係は無い。

カマドは、東壁や南よりに24cm掘り込み構築されている。前庭部にはピット及び土壤が検出されており、カマドに関わる施設と考えられる。

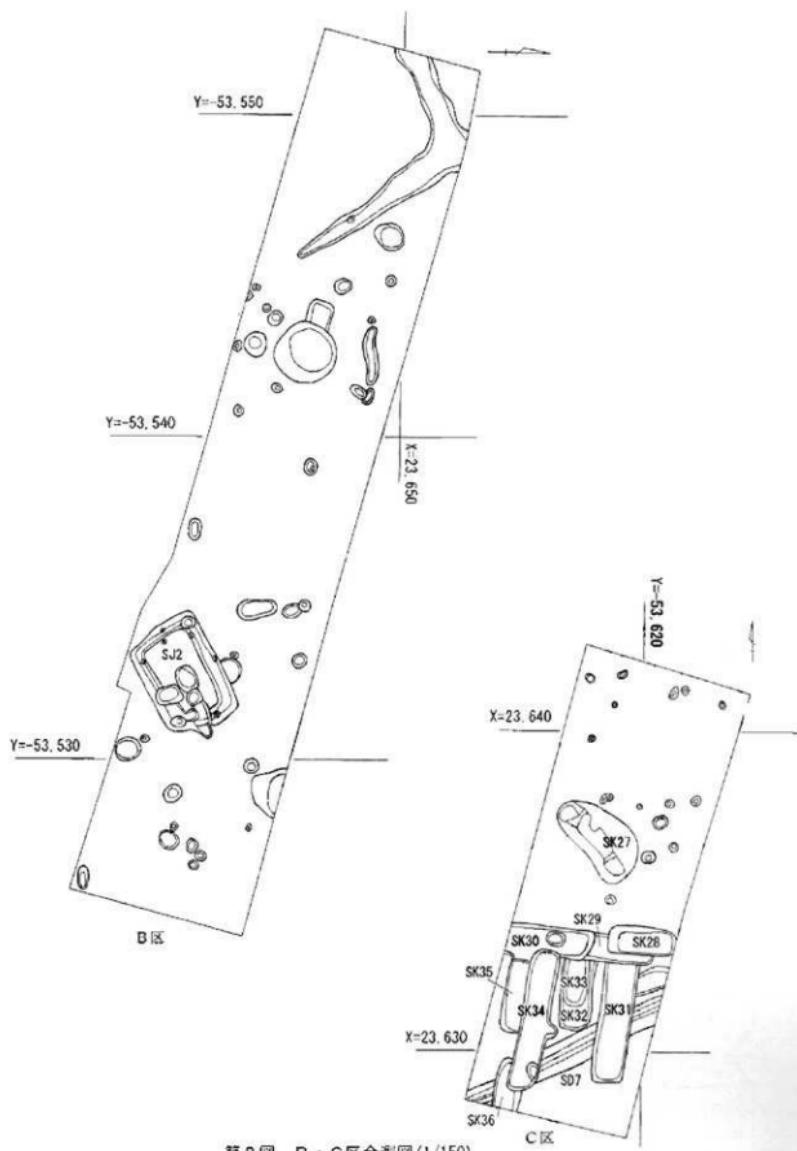
遺物は住居内から比較的多く検出されている。土器類、須恵器の土器類の他に、砥石、鉄製品（釘？）、磨石が検出された。



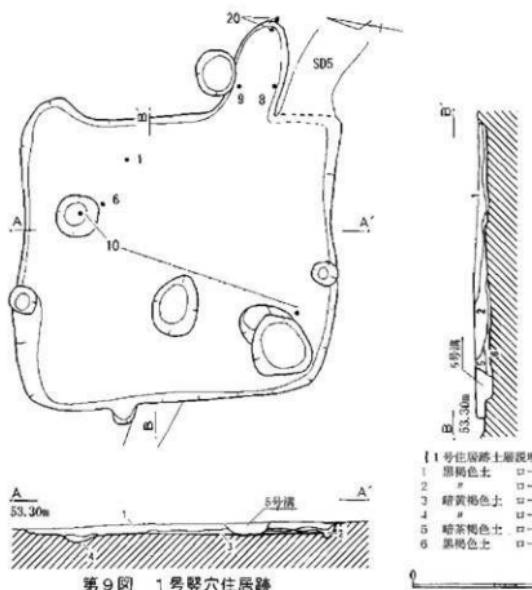
第6図 グリッド配置図(1/800)



第7図 A区全測図(1/200)

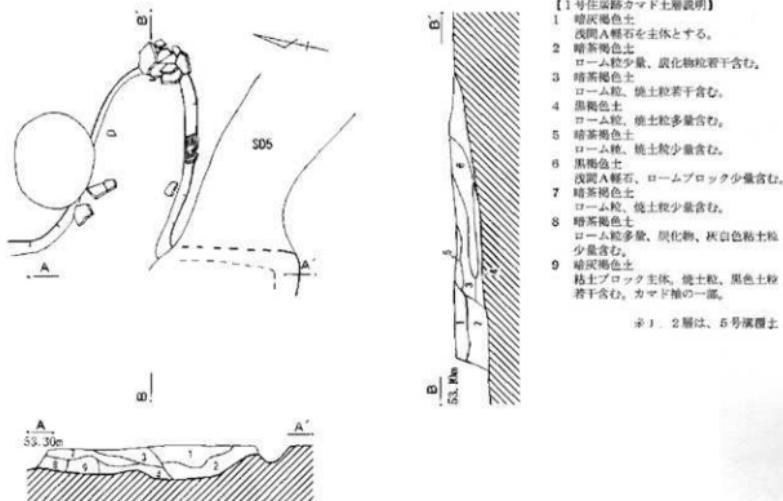


第8図 B・C区全測図(1/150)



第9図 1号竪穴住居跡

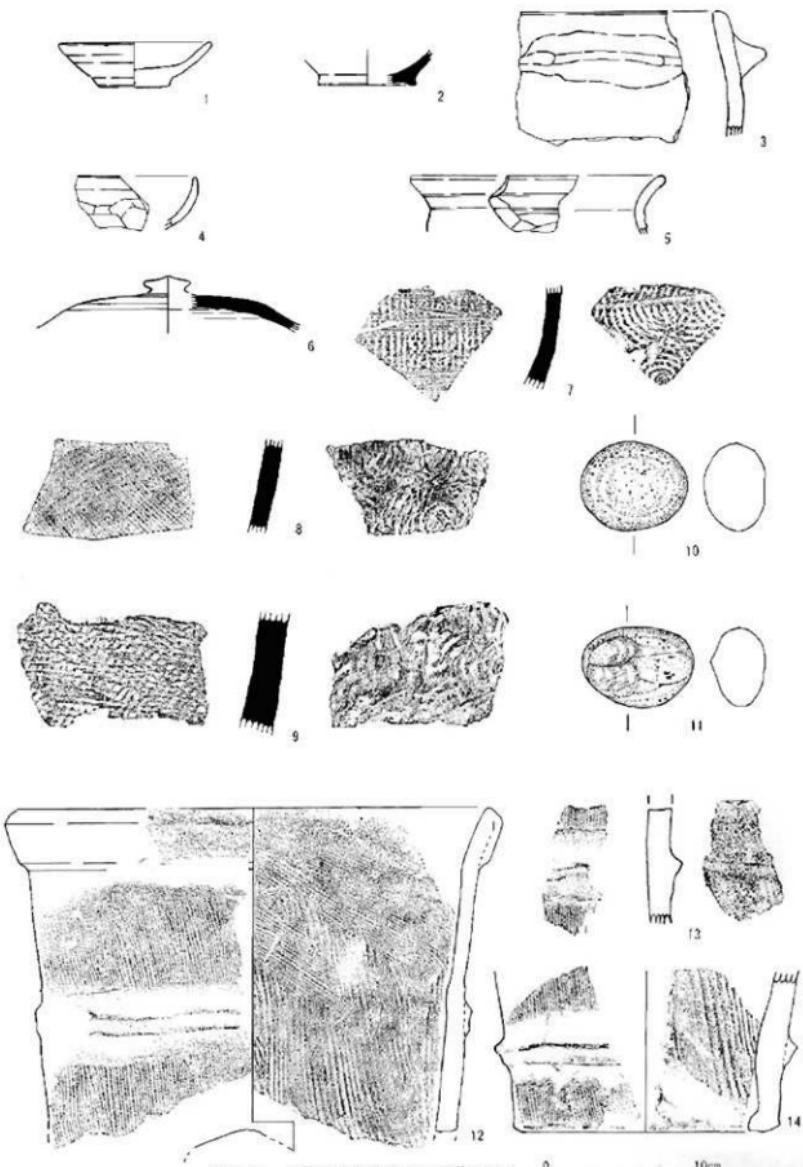
- 【1号住居跡土層説明】
- 1 黒褐色土 ローム粒、白色バニス多量含む。
  - 2 " ローム粒、燒土粒、炭化物少量含む。
  - 3 緑茶褐色土 ロームブロック多量含む。やや硬質。
  - 4 " ロームブロック少量含む。軟質。
  - 5 緑茶褐色土 ローム粒、燒土粒少量含む。
  - 6 黒褐色土 ロームブロック少量含む。



第10図 1号竪穴住居跡カマド

- 【1号住居跡カマド土層説明】
- 1 緑茶褐色土 浅間A颗粒を主体とする。
  - 2 緑茶褐色土 ローム粒少量、炭化物灰岩若干含む。
  - 3 緑茶褐色土 ローム粒、燒土粒若干含む。
  - 4 黒褐色土 ローム粒、燒土粒多量含む。
  - 5 緑茶褐色土 ローム粒、燒土粒少量含む。
  - 6 黒褐色土 浅間A颗粒、ロームブロック少量含む。
  - 7 緑茶褐色土 ローム粒、燒土粒少量含む。
  - 8 緑茶褐色土 ローム粒多量、炭化物、灰白色粘土粒少量含む。
  - 9 緑茶褐色土 粘土ブロック主体、燒土粒、黑色土粒若干含む。カマド袖の一部。

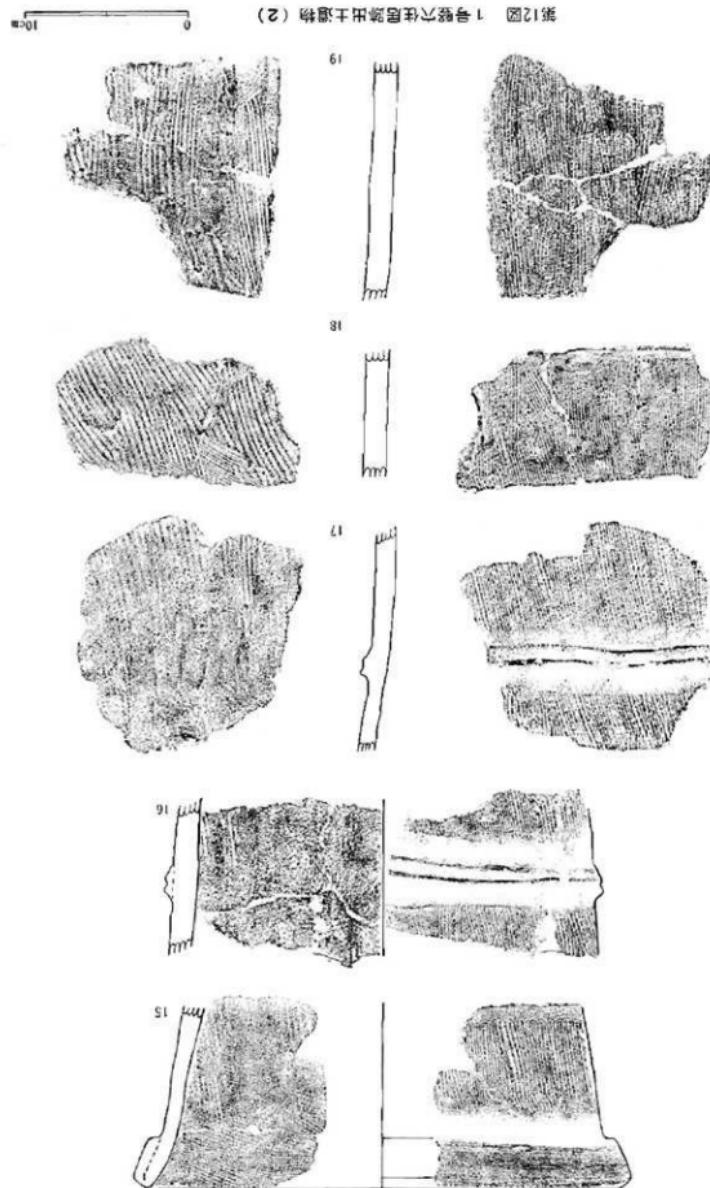
※1、2層は、5号演覆土

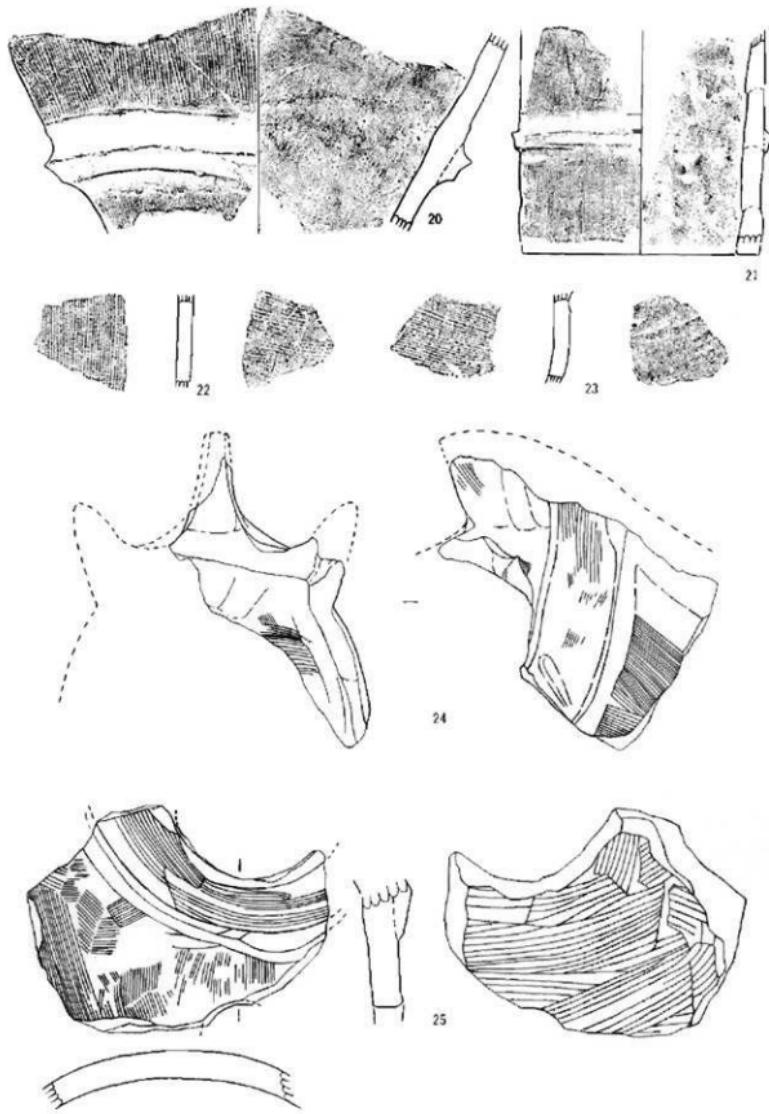


第11図 1号竪穴住居跡出土遺物 (1)

— 15 —

圖12圖 1號壁穴遺址出土遺物 (2)





第13図 1号竪穴住居跡出土遺物（3）

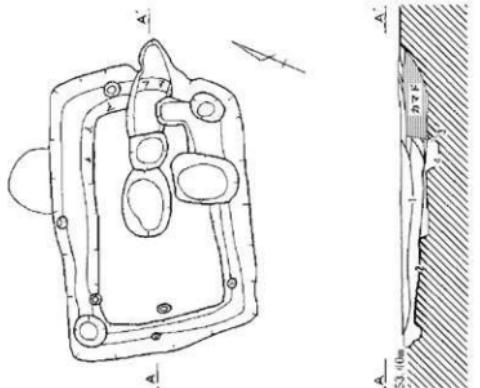
0 10cm

## 1号住居跡出土遺物觀察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	小皿	(9.0)	2.7	4.4	灰黃褐色	普通	石英、雲母、微鈣粒、微化鉄粒	図示45%	図示、底部回転条切り未調整
2	高台碗	-	(2.1)	(5.8)	灰色	普通	石英、長石、片岩	図示20%	覆土
3	羽釜	-	-	-	暗赤褐色	やや悪石	石英、角閃石、チャート、長石	破片	図示、外側に煤付着
4	壺	-	-	-	淡橙褐色	普通	石英、角閃石、微鈣粒	図示7%	図示
5	甕	(15.0)	(3.5)	-	褐褐色	普通	石英、雲母、微鈣粒	図示10%	覆土
6	蓋	-	-	-	灰色	良好	石英、片岩、白色粒	図示30%	図示
7	甕	-	-	-	灰白色	やや悪石	石英、黑色粒	破片	カマド、平行+回転ナデ、内面青海波
8	甕	-	-	-	灰褐色	普通	石英、長石、片岩	破片	カマド、外面平行、内面青海波
9	甕	-	-	-	暗灰褐色	普通	石英、長石、片岩	破片	カマド、外面平行、内面青海波
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	-	石材	残存率	備考
10	壓り石	6.4cm	5.5cm	3.7cm	167.8g	-	角閃安山岩	100%	図示、横円状で全面磨耗
11	壓り石	6.7cm	4.8cm	3.8cm	74.4g	-	角閃安山岩	100%	図示、椎円状で全面磨耗

## 1号住居跡出土埴輪觀察表

番号	種別	色調	焼成	胎土	外側調査	内面調査	残存率	備考
12	円筒	暗赤褐色	普通	石英、角閃石、バミス、砂粒	観ハケ6本/cm、 口縁横ハケ	斜位ハケ6本/cm 縦3本/cm	図示20%	カマド内
13	円筒	明赤褐色	普通	石英、角閃安山岩粒、バミス	観ハケ6本/cm	観ハケ5本/cm	破片	覆土
14	円筒	明茶褐色	良好	石英、角閃石、長石、バミス	観ハケ6本/cm、ナデ	観ハケ3本/cm	図示15%	覆土
15	円筒	灰赤褐色	良好	石英、角閃石、バミス、砂粒	観ハケ6本/cm、 口縁横ハケ	斜位ハケ5本/cm、 縦4本/cm	図示10%	覆土
16	円筒	明赤褐色	普通	石英、角閃安山岩粒、砂粒	観ハケ6本/cm	観ハケ4本/cm	図示20%	カマド内
17	円筒	明茶褐色	普通	石英、角閃安山岩粒、砂粒	観ハケ6本/cm	観ハケ3本/cm	破片	カマド内
18	円筒	暗赤褐色	普通	石英、角閃安山岩粒、バミス	観ハケ6本/cm	斜位ハケ 3本/cm~6本/cm	破片	図示
19	円筒	橙褐色	普通	石英、角閃石、バミス、砂粒	観ハケ6本/cm	観ハケ4本/cm	破片	カマド内
20	円筒	橙褐色	普通	石英、角閃安山岩粒、チャート	観ハケ6本/cm	斜位ハケ、観ハケ3本/cm	図示30%	カマド内、傾斜用
21	形象	赤褐色	良好	石英、角閃石、バミス	観ハケ10本/cm	ナデ	図示10%	カマド内
22	形象	明赤褐色	良好	石英、角閃安山岩粒、バミス	観ハケ6本/cm	斜位ハケ5本/cm	破片	図示
23	形象	淡赤褐色	良好	石英、角閃石、バミス、砂粒	観ハケ6本/cm、ナデ	ナデ	破片	図示
24	形象	暗褐色~ 橙褐色	普通	石英、角閃安山岩粒、片岩、 バミス	ハケメ6本/cm、指ナデ	ハケメ4本/cm、ナデ	破片	カマド、周囲の堅
25	形象	橙褐色	普通	石英、角閃安山岩粒、 砂粒(粗い)	ハケメ6本/cm	ハケメ3本/cm	破片	カマド、周囲の軟

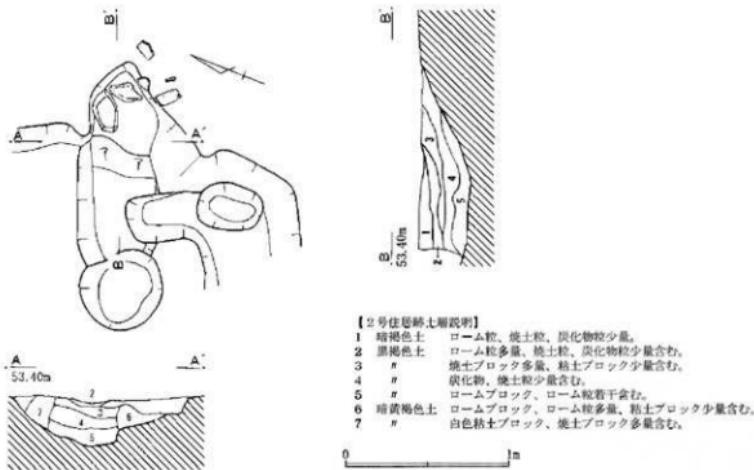


第14図 2号竖穴住居跡

【2号住居跡土層説明】

- 1 暗赤褐色土 ローム粒多量、ローム／ロック少量。
- 2 暗黃褐色土 ローム粒多量、燒土粒、炭化物粒少量含む。
- 3 黑褐色土 燃土ブロック多量、粘土ブロック少量含む。
- 4 " " 炭化物、燒土粒少量含む。

0 2m

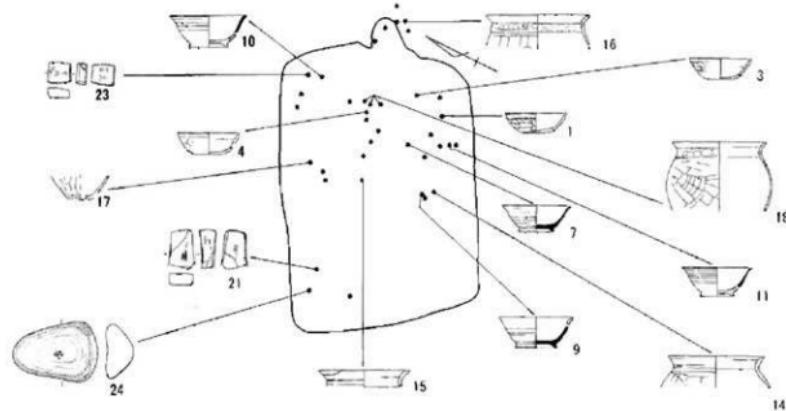


第15図 2号竖穴住居跡カマド

【2号住居跡土層説明】

- 1 暗褐色土 ローム粒、燒土粒、炭化物粒少量。
- 2 黑褐色土 ローム粒多量、燒土粒、炭化物粒少量含む。
- 3 " " 燃土ブロック多量、粘土ブロック少量含む。
- 4 " " 炭化物、燒土粒少量含む。
- 5 " " ロームブロック、ローム粒多量、粘土ブロック少量含む。
- 6 暗黃褐色土 ロームブロック、ローム粒多量、粘土ブロック少量含む。
- 7 " " 白色粘土ブロック、燒土ブロック多量含む。

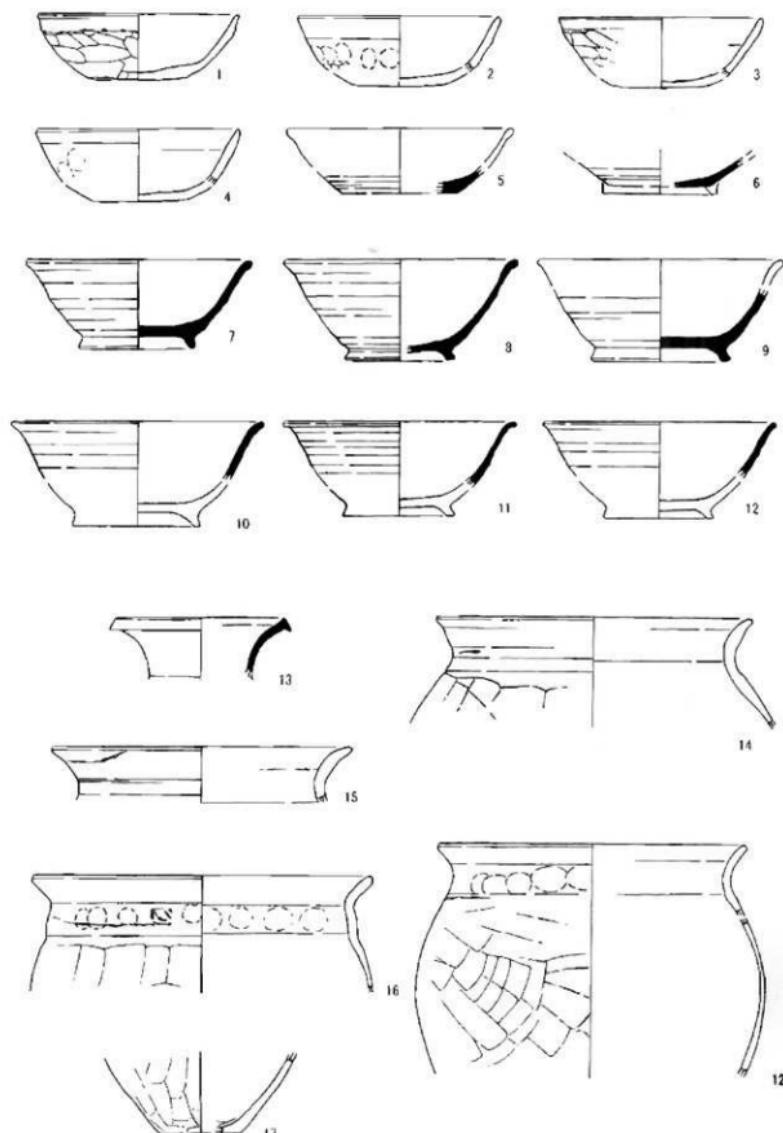
0 1m



第16図 2号竖穴住居跡遺物分布状況

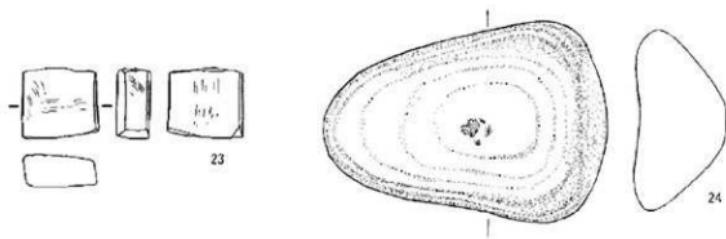
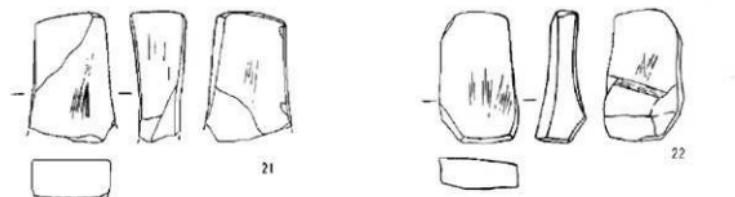
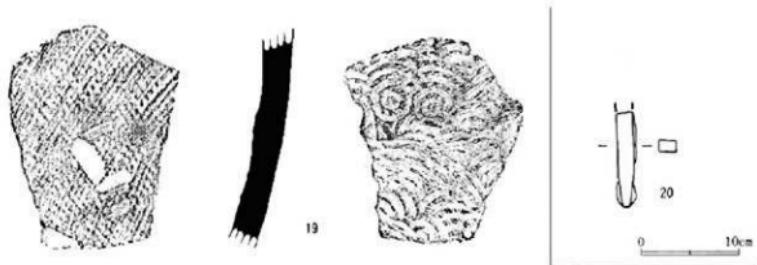
2号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	环	(12.2)	4.0	6.0	暗赤褐色	良好	石英、長石、雲母、微砂粒	図示30%	図示
2	环	(12.3)	(3.4)	-	灰赤褐色	やや悪	角閃石、雲母、(粗良)	図示30%	覆土
3	环	(12.3)	(3.7)	-	赤褐色	普通	石英、雲母	図示10%	図示
4	环	(12.3)	(3.4)	-	赤褐色	普通	角閃石、片岩、砂粒	図示10%	図示
5	环	-	(1.7)	(7.0)	明灰色	普通	長石、片岩、酸化鉄粒	図示18%	覆土、底部回転糞切り未調査、木野
6	高台付皿	-	(1.9)	-	明灰色	良好	石英、長石	図示15%	覆土、南北金か?
7	高台碗	(13.6)	5.5	7.1	暗黃灰色	普通	石英、酸化鉄粒、(粗い)	図示40%	図示、木野
8	高台碗	(14.1)	6.2	(6.6)	暗褐褐色	不良	石英、酸化鉄粒	図示28%	カマド、酸化鉄、内面に重ね燒き瓶
9	高台碗	-	(4.5)	(8.2)	灰黄褐色	やや悪	石英、長石、片岩、酸化鉄粒	図示30%	図示、木野
10	高台碗	(15.7)	(3.6)	-	灰白色	不良	微砂粒、酸化鉄粒	図示10%	図示、木野
11	高台碗	(14.0)	(4.1)	-	暗灰色	良好	石英、片岩、黒色粒、(粗い)	図示20%	図示、木野
12	高台碗	(14.1)	(3.5)	-	灰赤褐色	不良	石英、酸化鉄粒、(粗い)	図示10%	覆土、木野
13	平瓶?	(10.3)	(3.8)	-	灰黑色	良好	長石、片岩	図示10%	覆土、木野
14	甕	(19.1)	(6.8)	-	赤褐色	普通	石英、長石、砂粒	図示20%	図示
15	甕	(18.3)	(3.5)	-	赤褐色	普通	石英、砂粒	図示20%	図示
16	甕	(20.6)	(7.2)	-	赤褐色	普通	石英、角閃石、長石	図示20%	カマド
17	甕	-	(4.8)	(5.0)	暗褐色	不良	石英、角閃石、酸化鉄粒、白色粒	図示30%	図示
18	甕	(18.6)	(4.4)	-	灰黄赤色	普通	角閃石、酸化鉄粒、微砂粒	図示20%	図示
19	甕	-	-	-	淡灰色	普通	石英、長石、片岩	破片	覆土、木野、外面平行、内面青苔被
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	-	石材	残存率	備考
20	釘?	3.9cm	0.7cm	0.5cm	3.3g	-	-	破片	覆土、角棒状
21	砾石	7.9cm	6.2cm	3.4cm	160.8g	-	凝灰岩	-	覆土
22	砾石	8.0cm	4.8cm	3.1cm	109.3g	-	凝灰岩	-	覆土
23	砾石	4.3cm	4.7cm	2.1cm	75.8g	-	凝灰岩	-	図示
24	砾石	17.3cm	11.0cm	6.2cm	1,664kg	-	砂岩	-	図示



第17図 2号竪穴住居跡出土遺物（1）

0 10cm



第18図 2号竪穴住居跡出土遺物（2）

0 10cm

### 【3号住居跡】

お手長山古墳周溝確認のために設定された第1トレントから検出された。F-9グリッドに位置する。規模は、東壁で2.58m、南壁で2.22mが検出されており、確認面から床面までの深さは25cm程度である。住居跡は全体の1/3程度が検出されている。主軸方位は、N-90°-Eである。東壁にカマドが設けられている。

カマドは、燃焼部で長さ75cm、幅60cmを測る。前庭部から燃焼部中央が浅く掘りぬかれている。カマド内及びその周辺から多量の遺物が検出されている。特にカマド南側に位置するピットは貯蔵穴と推定され、須恵器壺・坏・土師器壺等が比較的まとまって出土している。カマド内では、台付甕が良好な状態で検出されている。

### B. 窪穴遺構

調査では5基が検出されている。土層断面等から判断し、中世の遺構群と認識した。3号、5号など南北の壁際中央付近に一对のピットを設ける遺構群が、熊野遺跡周辺で調査されており、いずれも中世の所産とされることからも、この点が裏付けられる。また、遺物は、極く少量の破片が検出されているが、古代の遺物が中心であり、中世の遺構群形成にあたり、混入したものと考えられる。本遺構群に限り出土遺物から存続時期の特定を行うことは困難である。

### 【1号窓穴遺構】

C-D-8グリッドに位置する。長軸は3.48m、短軸は2.40mである。主軸方位は、N-22°-Wである。平面形は長方形と考えられるが西壁については検出されていない。

1号溝、3号土塙と切合い関係を有し、本遺構が最も古いことが確認されている。床面は、若干凹凸があり、確認面からの深さは、15~20cmである。出土遺物には土師器坏、須恵器坏、甕の破片があるが、いずれも混入品と考えられる。

### 【2号窓穴遺構】

D-7グリッドに位置する。長軸は、3.72m、短軸は2.76mである。主軸方位は、N-90°-Wである。平面形は台形である。

土壤、小ピットが伴うが、いずれも浅いものである。確認面から床面までの深さは、15cmである。

出土遺物には、須恵器壺の破片があるが、混入品と考えられる。

### 【3号窓穴遺構】

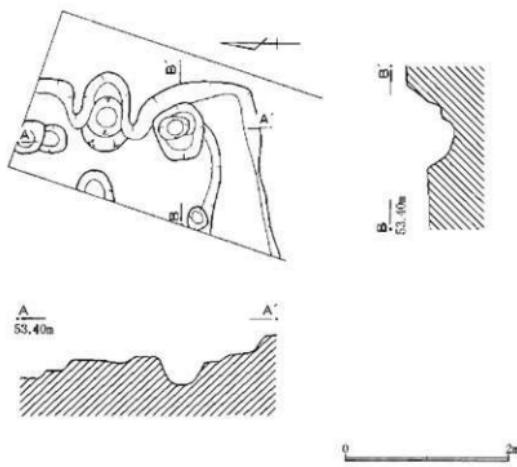
C-3~4グリッドに位置する。長軸は、3.42m、短軸は2.88mである。平面形は長方形を呈し、主軸方位は、N-20°-Eである。南壁及び北壁中央付近に深めのピットが一对確認されている。この形態は、5号窓穴遺構と共通する。この対ピットは、斜めに掘り込まれていることが確認されている。確認面から床面までの深さは24~30cmである。床面及び壁際にはピット及び土壤が検出された。鉄滓及び土師器片が検出されている。

### 【4号窓穴遺構】

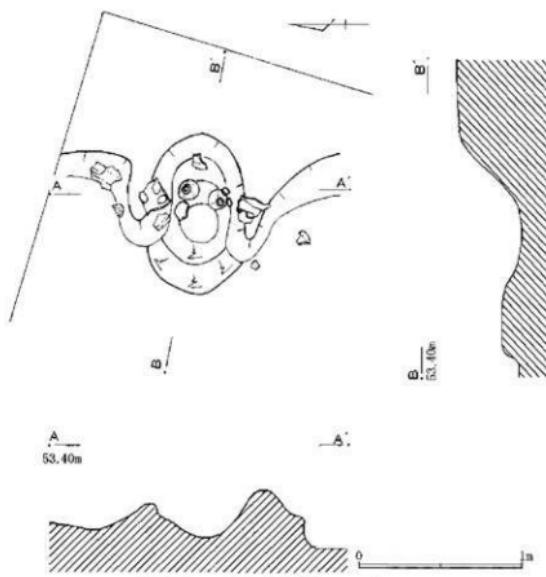
C-3グリッドに位置する。長軸は、4.14m、短軸は2.82mである。主軸方位は、N-70°-Wである。5号溝と切合い関係を有し、本遺構が古いことが判明している。確認面から床面までの深さは10~28cmである。周囲には土壤及び小ピットが伴うが性格については明確ではない。

### 【5号窓穴遺構】

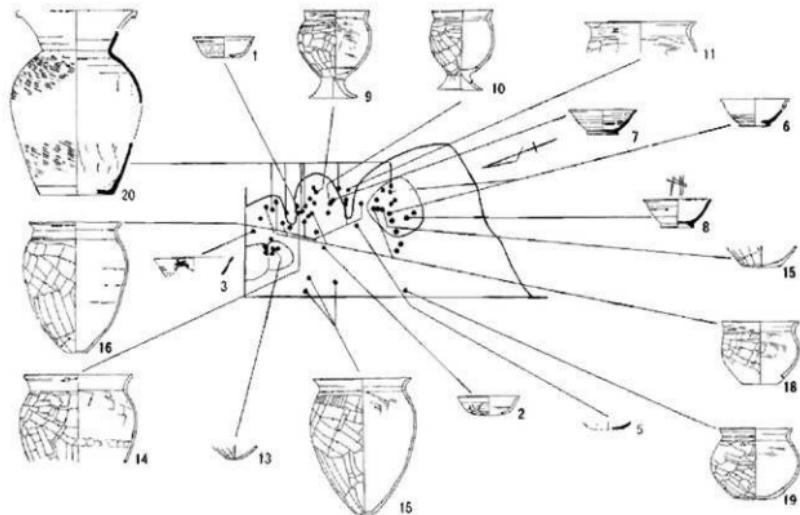
C-2~3グリッドに位置する。長軸は、2.82m、短軸は2.22mである。平面形は、長方形を呈する。主軸方位は、N-16°-Eである。南壁及び北壁中央付近に深めのピットが一对確認されている。この対ピットは、垂直に掘り込まれている。この他に西壁にもピットが検出された。確認面から床面までの深さは10~30cmである。床面は、やや凹凸がある。



第19図 3号竖穴住居跡



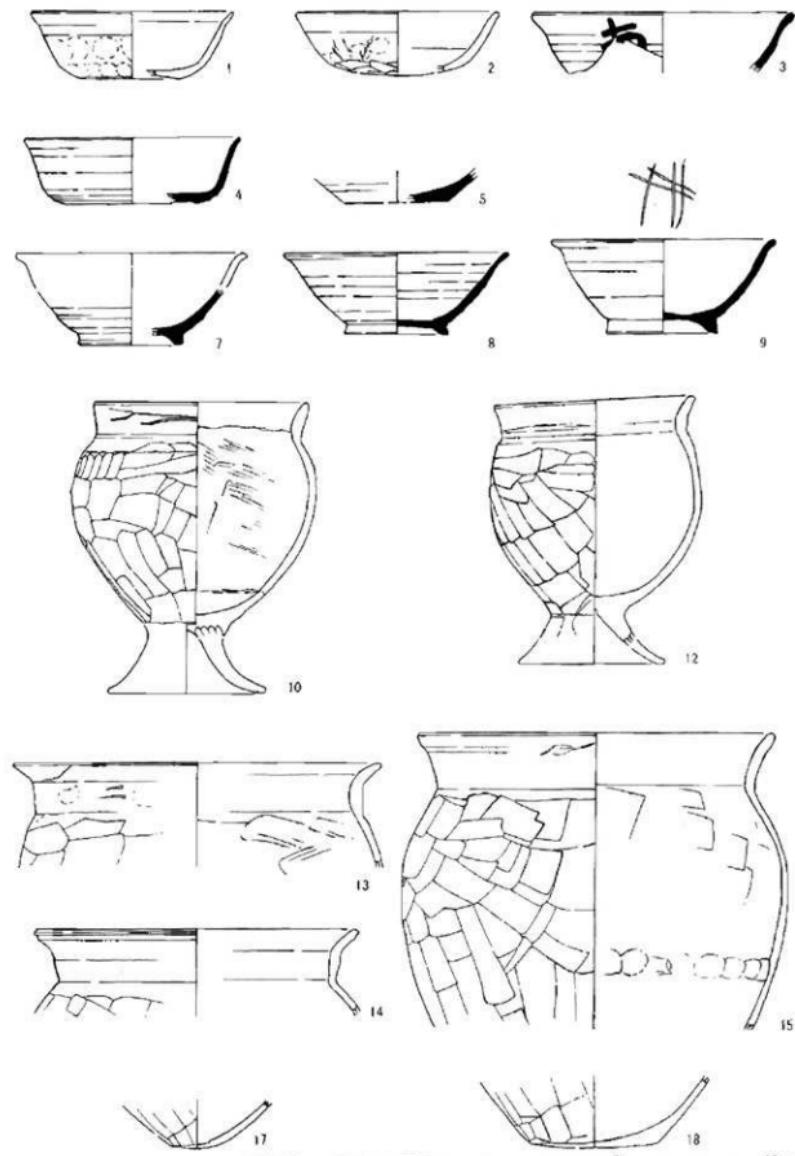
第20図 3号壁穴住居跡カマド



第21図 3号竪穴住居跡遺物分布状況

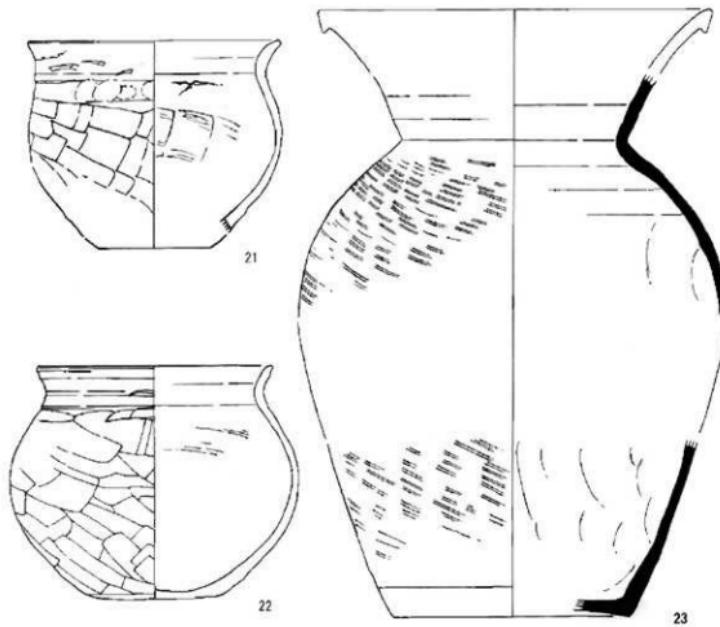
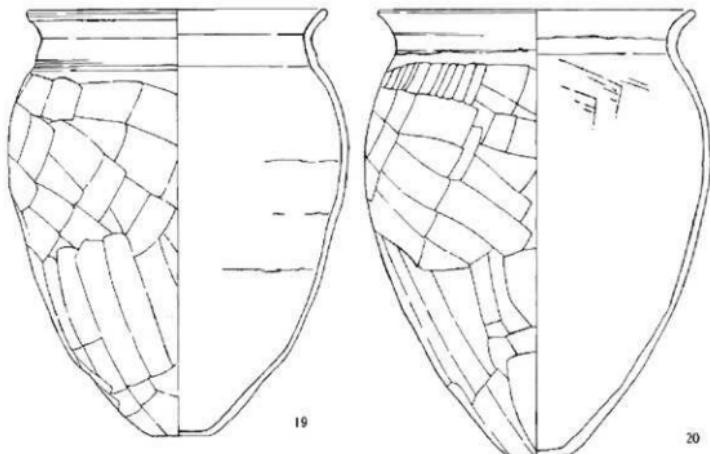
3号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	坪	(12.2)	4.1	6.0	赤褐色	普通	石英、酸化鉄粒	図示45%	カマド
2	坪	(12.1)	(3.9)	-	暗赤褐色	普通	石英、角閃石	図示30%	図示
3	高台壇	(15.6)	(5.7)	-	赤褐色	普通	石英、片岩、酸化鉄粒	図示65%	カマド、体部に墨書き、酸化焰、末野
4	坪	(13.0)	4.0	(9.5)	明灰色	良好	石英、長石、片岩	活字20%	覆土、底部回転へ前り、末野
5	坪	-	(2.13)	6.1	明灰色	普通	石英、黒色粒	図示50%	カマド、底部回転へ切り未調整、支脚
6	高台壇	-	(3.43)	(6.1)	明灰色	普通	石英、長石、片岩、チャート	図示35%	図示、末野
7	高台壇	(13.3)	4.9	(6.2)	灰褐色	不良	石英、黄泥、酸化鉄粒	図示25%	カマド、酸化焰、末野
8	高台壇	13.3	5.7	(6.6)	明灰色	普通	石英、長石、片岩、黒色粒、繊維	図示90%	図示、内底部にヘラ記号あり、末野
9	台付甕	12.8	(14.39)	-	暗赤褐色	良好	石英、長石、砂粒	図示90%	カマド
10	台付甕	12.0	(15.0)	-	暗赤褐色	普通	石英、長石、砂粒	図示70%	カマド
11	甕	(22.1)	(6.49)	-	暗赤褐色	普通	石英、砂粒、酸化鉄粒	図示40%	図示
12	甕	(19.3)	(6.29)	-	橙褐色	良好	石英、角閃石、砂粒	図示25%	覆土
13	甕	-	(3.03)	(3.0)	暗褐色	普通	石英、黑色粒、微砂粒	図示70%	図示
14	甕	(21.2)	(18.0)	-	橙褐色	普通	石英、チャート、砂粒、酸化鉄粒	図示30%	カマド
15	甕	-	(4.33)	(7.6)	黒褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示30%	図示
16	甕	(18.2)	(24.7)	(7.7)	暗褐色	普通	石英、長石、砂粒、酸化鉄粒	図示40%	カマド
17	甕	19.3	27.5	3.7	暗赤褐色	良好	石英、長石、砂粒、酸化鉄粒	図示70%	図示
18	小形甕	15.3	(11.89)	-	暗赤褐色	普通	石英、長石、バミス、砂粒	図示70%	カマド、蓋みやせあり
19	小形甕	(14.3)	14.3	(8.4)	赤褐色	良好	石英、角閃石、雲母	図示45%	図示
20	甕	-	(33.33)	(14.4)	明灰色	良好	石英、長石、片岩	図示20%	図示



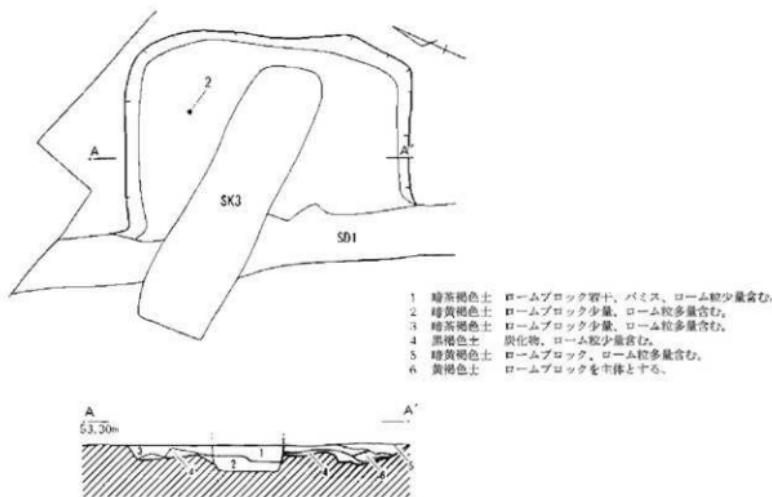
第22図 3号竪穴住居跡出土遺物 (1)

0 10cm



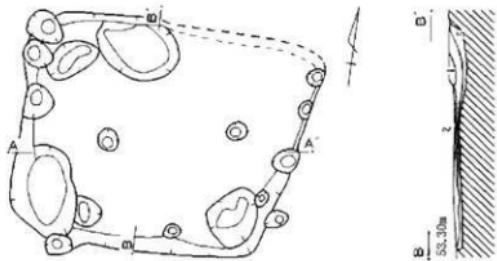
第23図 3号竪穴住居跡出土遺物（2）

0 10cm



第24図 1号竪穴遺構

0 2m

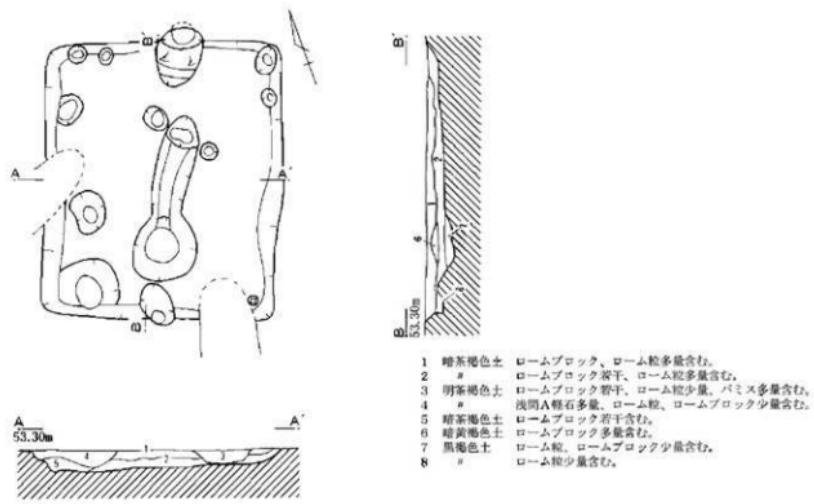


- 1 緑茶褐色土 ローム粒、バシス少量含む。  
 2 緑黄褐色土 現代の擾乱。  
 3 緑茶褐色土 ロームブロック多量含む。  
 4 緑茶褐色土 ロームブロックを主体とする。  
 5 緑黄褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量含む。

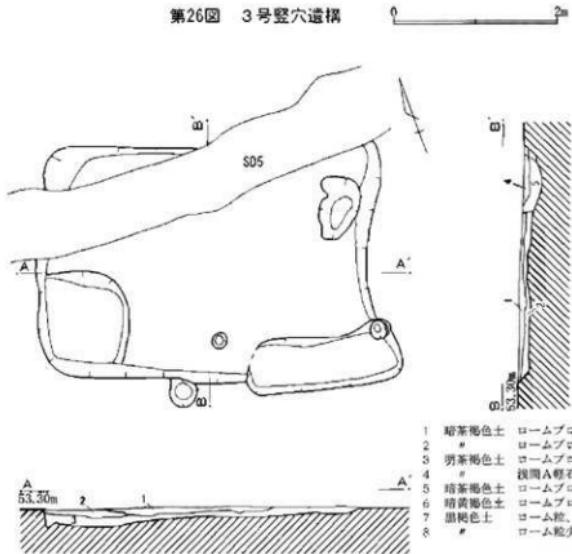


第25図 2号竪穴遺構

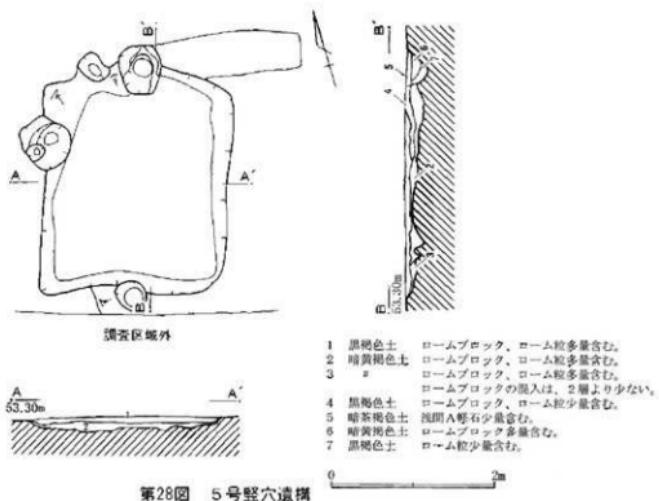
0 2m



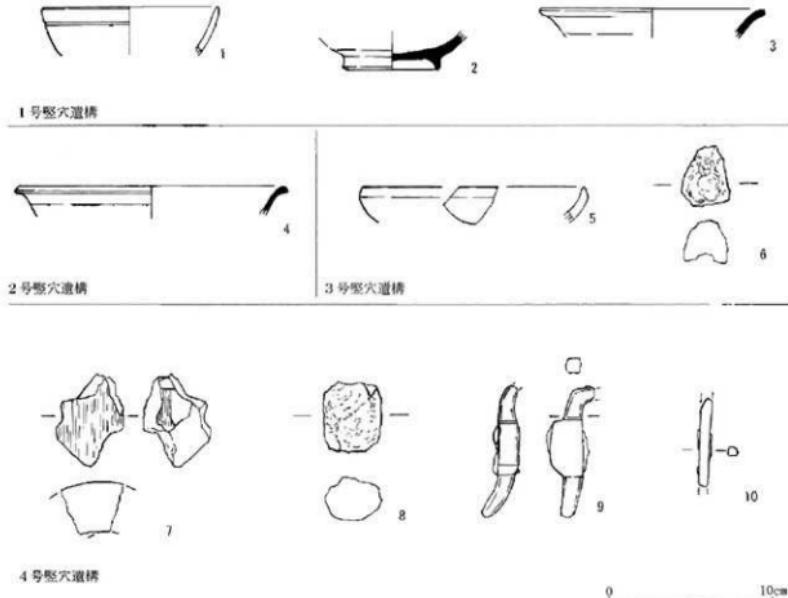
第26図 3号竖穴墓構造



第27図 4号整穴墓構造



第28図 5号竖穴遺構



第29図 壑穴遺構出土遺物

1号壧穴遺構遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	环	(10.9)	(3.0)	-	淡赤褐色	普通	石英、角閃石	図示12%	覆土、口縁外面に浅い沈線
2	高台塊	-	(2.4)	5.9	褐色	やや悪	石英、長石、酸化鉄粒	図示95%	図示、末野産
3	高台塊	(13.6)	(1.7)	-	明灰色	良好	石英、長石、黒色粒	図示10%	覆土、末野産

2号壧穴遺構遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
4	高台塊	(16.1)	(1.8)	-	明灰色	普通	片岩、黒色粒	図示10%	覆土、末野産

3号壧穴遺構観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
5	环	(13.5)	(3.3)	-	橙色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示5%	覆土
6	鉄滓	長さ(cm) 2.4	幅(cm) 2.0	厚さ(cm) 1.8	重さ(g) 10.6	磁着度 中	-	-	覆土、若干発泡、鉄滓系遺物?

4号壧穴遺構観察表

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	磁着度	胎土	残存率	備考
7	羽口	5.6	4.0	3.0	-	微砂粒、スサ	破片	図示	
8	鉄滓系遺物	2.8	2.3	1.8	16.8	強	-	-	覆土、若干の気泡、亀裂
9	不明鉄製品	5.3	1.4	6.8	10.5	-	-	-	覆土、片側端部屈曲、中央部幅広
10	不明鉄製品	3.6	0.4	1.4	1.4	-	-	-	覆土、断面方形で棒状、釘?

### C 土壙

A～C区で検出されている。切り合ひ関係等からすべて中世に属するものと推定されるが明確な時期等は不明である。出土遺物は、堅穴遺構 同様少量であり、古代のものも含んでいるが、混入品である。規模、主軸方位等は以下のとおりである。

土壙群のうち、明らかに近現代とされるものについては、省略する。

#### 【1号土壙】

A区東部に位置する。C-7～8グリッドにあたる。2号土壙と重複しており、本遺構が新しいことが確認された。

規模は、長軸3.90m、短軸84cmを測る。主軸方位は、N-13°-Eである。平面形は長方形を呈する。確認面からの深さは48cmを測る。

#### 【2号土壙】

A区東部に位置する。C-8グリッドにあたる。2号土壙は、1号土壙より古いものである。西部は1号土壙により切られているが、平面形は、梢円形が想定される。規模は、長軸（現存長）1.26m、短軸が1.14mである。確認面からの深さは18cmである。

#### 【3号土壙】

A区東部に位置する。C-8グリッドにあたる。1号溝と切り合ひ関係を有し、本土壙の方が新しいことが確認されている。規模は、長軸3.6m、短軸90cmを測る。主軸方位は、N-90°-Eである。平面形は、長方形を呈する。確認面からの深さは42cmである。西壁の立ち上がりは直であり、東壁はなだらかである。土層堆積は、西方から流れ込んだ状態が確認されている。

#### 【4号土壙】

A区東部に位置する。D-E-7グリッドにあたる。5号土壙と重複しており、本遺構が新しいことが確認された。遺構の一部が調査区域外に延びているため、全体像は不明である。規模は、長軸（現存長）5.16m、短軸90cmを測る。主軸方位は、N-5°-Eである。土壙底面には段差があり、さらに重複がある可能性があるが、断面では把握できなかった。土層堆積状態は、自然堆積というよりも人為的なものである可能性が高い。

#### 【5号土壙】

A区東部に位置する。D-7グリッドにあたる。5号土壙は、4号土壙より古いものである。規模は、長軸（現存長）2.22m、短軸1.62mを測る。平面形は不整形を呈する。主軸方位は不明である。

#### 【6号土壙】

A区東部に位置する。D-7グリッドにあたる。7号土壙と重複しているが、新旧関係については未確認である。平面形は長方形である。規模は、長軸4.32m、短軸92cmである。主軸方位はN-10°-Eである。確認面から底面までの深さは48cmである。

#### 【7号土壙】

A区東部に位置する。D-7グリッドにあたる。6号土壙と重複しているが、新旧関係は未確認である。平面形は長方形である。規模は、長軸4.32m、短軸72cmである。主軸方位は、N-11°-Eである。

#### 【8号土壙】

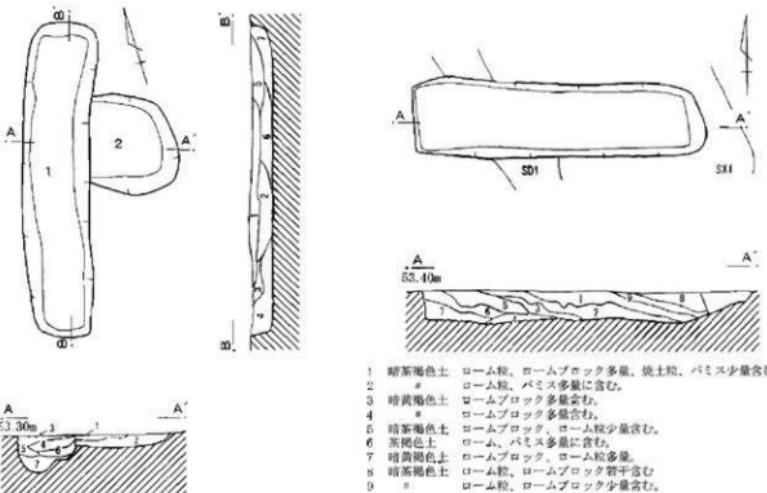
A区東部に位置する。C-7グリッドにあたる。9号土壙と重複関係にあり、9号土壙の下層に存在することが確認されている。規模は長軸（現存長）2.58m、短軸96cmである。平面形は長方形である。主軸方位は、N-80°-Wである。確認面から底面までの深さは30cmである。

#### 【9号土壙】

A区東部に位置する。C-7グリッドにあたる。8号土壙と重複関係にあり、本遺構は8号土壙の上層にのる。規模は長軸2.40m、短軸1.20mである。平面形は長方形である。主軸方位は、N-16°-Wである。確認面から底面までの深さは12cmである。

#### 【10号土壙】

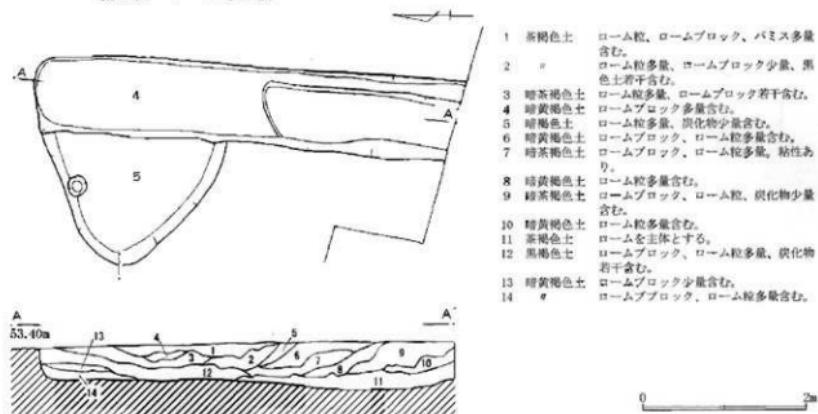
A区東部に位置する。C-D-6グリッドにあたる。2号溝と重複関係を有し、本遺構が新しいことが確認されている。北端は調査区域外に延びており、南端は2号溝に切られているため全体像は不明である。また、本遺構南部付近では、別の土壙との重複関係があると想定されるが、新旧の関係等不明である。長軸（現存長）3.12m、短軸90cm



第31図 3号土壤

0 2m

第30図 1・2号土壤



第32図 4・5号土壤

である。主軸方位はN-10°-Eである。確認面からの深さは5cmと浅い。

#### 【11号土壤】

A区東部に位置する。D-6グリッドにあたる。2号溝と重複関係を有し、本遺構が古いことが確認されている。10号土壤同様、北部は調査区域外に延びており、南部は2号溝に切られているため全体像は不明である。規模は長軸（現存長）3.00m、短軸85cmを測る。主軸方位はN-11°-Eである。確認面からの深さは5cmと浅い。

#### 【12号土壤】

A区中央部に位置する。C-6グリッドにあたる。近現代の土壤と切り合い関係を有し、本土壤が古いことが確認されている。

規模は長軸（現存長）2.70m、短軸1.38mを測る。平面形は長方形を呈する。主軸方位はN-90°-Wである。確認面からの深さは24cmである。

#### 【13号土壤】

A区西部に位置する。C-3～4グリッドにあたる。規模は長軸3.12m、短軸1.14mを測る。平面形は長方形を呈する。主軸方位はN-72°-Wである。確認面からの深さは24cmを測る。

#### 【14号土壤】

A区西部に位置する。C-4グリッドにあたる。規模は長軸（現存長）3.54m、短軸99cmを測る。本遺構の北方は、調査区域外に延びており、遺構の全体像は不明であるが、平面形は、ほぼ長方形を呈するものと思われる。主軸方位はN-20°-Eである。確認面からの深さは30cmを測る。土層断面の観察から、南方から埋め戻されたものと推定する。

#### 【15号土壤】

A区西部に位置する。C～D-5グリッドにあたる。規模は長軸（現存長）2.88m、短軸78cmを測る。本遺構の南方は、調査区域外に延びており、遺構の全体像は不明であるが平面形は、ほぼ長方形を呈するものと思われる。主軸方位はN-20°-Eである。確認面からの深さは30cmである。

#### 【16号土壤】

A区東部に位置する。D-6～7グリッドにあたる。規模は長軸2.70m、短軸1.80mの不整橢円形を呈する。主軸方位はN-45°-Wである。ピット2基と重複しているが新旧関係は不明である。確認面からの深さは18cmである。

#### 【17号土壤】

A区東部に位置する。D-6グリッドにあたる。規模は、長軸2.28m、短軸2.16mである。平面形は円形に近い。主軸方位はN-60°-Eである。確認面からの深さは20cmを測る。

#### 【18号土壤】

A区東部に位置する。D-6グリッドにあたる。規模は、長軸3.12m、短軸2.28mを測る。平面形は、橢円形である。主軸方位はN-75°-Wである。確認面からの深さは30cmを測る。

#### 【19号土壤】

A区東部に位置する。D-7グリッドにあたる。規模は、長軸1.68m、短軸1.56mを測る。平面形は不整形である。主軸方位はN-4°-Eである。確認面からの深さは12cmを測る。

#### 【20号土壤】

A区東部に位置する。D-7グリッドにあたる。規模は、径1.14mを測る。平面形は円形である。2号溝と重複関係があり、本遺構の方が古いことが確認されている。確認面からの深さは18cmである。

#### 【21号土壤】

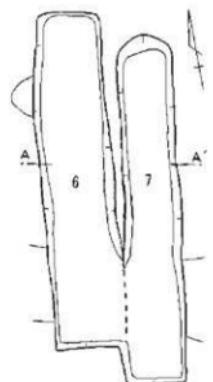
A区東部に位置する。D-8グリッドにあたる。規模は、径1.14mを測る。平面形は円形である。確認面からの深さは12cmである。

#### 【22号土壤】

A区東部に位置する。D-8グリッドにあたる。規模は、長軸1.26m、短軸90cmである。平面形は橢円形を呈する。確認面からの深さは18cmである。

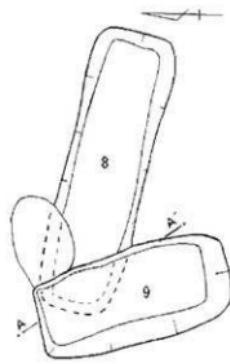
#### 【23号土壤】

A区東部に位置する。D-7グリッドにあたる。規模は、長軸1.41m、短軸1.26mである。平面形



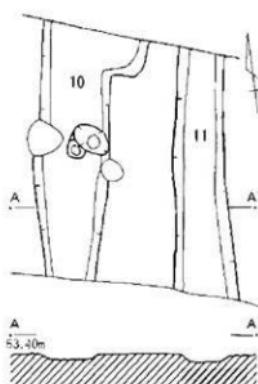
- 1 草葉褐色土 ロームブロック、ローム粒子少量含む。  
2 " " 1層に透析するが、色調やや暗。  
3 " " ロームブロック、ローム粒子多量含む。  
4 " " ロームブロック多量含む。硬質である。  
5 黒褐色土 ローム粒、ロームブロック少量含む。  
6 精耕褐色土 ローム粒、ロームブロック少量含む。  
7 黑褐色土 ロームブロック若干、ローム粒多量含む。  
8 精耕褐色土 ロームブロック少量含む。  
9 " " ロームブロック少量含む。  
10 " " ローム粒多量含む。

第33図 6・7号土壤

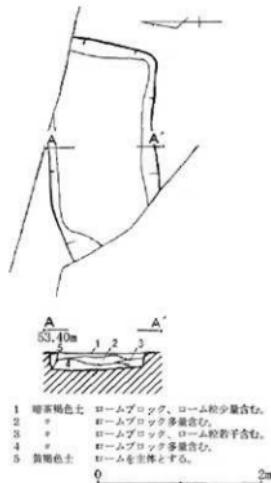


- 1 黑褐色土 バルク多量、ロームブロック若干含む。  
2 " " ローム粒、ロームブロック多量含む。  
3 精耕褐色土 ローム粒、ロームブロック多量含む。  
4 黑褐色土 ロームブロックを主体とする。  
5 精耕褐色土 ロームブロック、ローム粒多量含む。

第34図 8・9号土壤

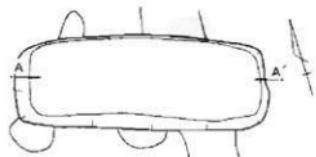


第35図 10・11号土壤



- 1 精耕褐色土 ロームブロック、ローム粒少量含む。  
2 " " ロームブロック多量含む。  
3 " " ロームブロック、ローム粒若干含む。  
4 " " ロームブロック多量含む。  
5 黑褐色土 ロームを主体とする。

第36図 12号土壤



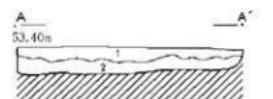
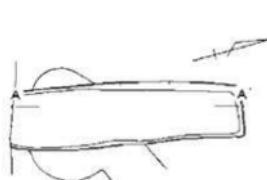
- 1 黒褐色土 深闊八種石、ローム粒多量、ロームブロック若干含む。
- 2 墓室地盤 多量、ロームブロック若干含む。
- 3 \*
- 4 \*
- 5 \*
- 6 黑褐色土 ローム粒、ロームブロック少量化。
- 7 黄褐色土 ロームブロック主。

第37図 13号土城



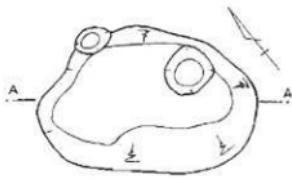
- 1 黒褐色土 バミス多量、ロームブロック若干含む。
- 2 \*
- 3 黃褐色地盤 ローム粒、ロームブロック多量に含む。
- 4 黄褐色地盤 ロームブロックを含む。
- 5 黑褐色地盤 ロームブロック、ローム粒多量含む。
- 6 黑褐色地盤 ローム粒多量、ロームブロック少量化。
- 7 黄褐色土 ロームブロック主。
- 8 \*
- 9 黑褐色土 ロームブロック、ローム粒少量含む。

第38図 14号土城



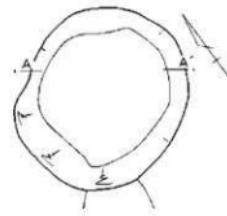
- 1 黑褐色土 ロームブロック、ローム粒多量含む。
- 2 細黄褐色土 ロームブロック、ローム粒多量含む。

第39図 15号土城



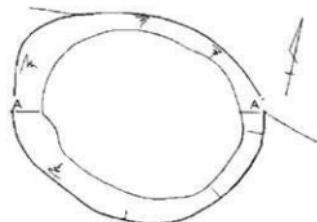
- 1 細黄褐色土 ロームブロック、ローム粒少量含む。
- 2 \*
- 3 \*
- 4 黑褐色土 ロームブロック多量含む。
- 5 黑褐色土 ロームブロック主。

第40図 16号土城



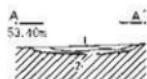
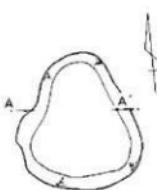
- 1 緑茶褐色土 ロームブロック若干、ローム粒、バミス少量含む。
- 2 緑黄褐色土 ロームブロック、ローム粒多量含む。
- 3 \*
- 4 黒褐色土 ロームを主体とする。黒色土粒子混入する。

第41図 17号土壤



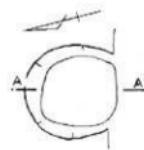
- 1 緑茶褐色土 ロームブロック若干、ローム粒、バミス少量含む。
- 2 \*
- 3 緑黄褐色土 ロームブロック多量に含む。
- 4 黄褐色土 ロームブロックを主体とする。

第42図 18号土壤



- 1 黒褐色土 ロームブロック、ローム粒若干含む。
- 2 緑黄褐色土 ロームブロックを主体とする。

第43図 19号土壤



- 1 黒褐色土 ロームブロック若干含む。
- 2 \*
- 3 ロームブロック、ローム粒多量含む。

0 2m

第44図 20号土壤

は、不整円形を呈する。確認面からの深さは10cmである。

#### 【24号土壤】

A区東部に位置する。D-6グリッドにあたる。規模は径84cmである。平面形は円形を呈する。確認面からの深さは5cmである。

#### 【25号土壤】

A区東部に位置する。D-5～6グリッドにあたる。規模は長軸1.80m、短軸1.26mを測る。平面形は不整形である。5箇所にピットが確認されている。確認面からの深さは18cmである。

#### 【26号土壤】

A区東部に位置する。D-5グリッドにあたる。規模は長軸1.38m、短軸1.20mを測る。主軸方位はN-10°-Wである。平面形は、不整円形である。確認面からの深さは12cmである。

#### 【27号土壤】

C区中央部に位置する。F-1グリッドにあたる。規模は長軸3.00m、短軸1.62mを測る。平面形は、不整形である。確認面からの深さは60cmである。

#### 【28号土壤】

C区南部に位置する。F-1～2グリッドにあたる。29、31号土壤と重複しており、本土壤が最も新しい段階のものであることが判明している。

規模は、長軸2.04m、短軸96cmを測る。平面形は長方形である。主軸方位はN-83°-Wである。確認面からの深さは49cmを測る。

#### 【29号土壤】

C区南部に位置する。F-1～2グリッドにあたる。28、31号土壤と重複しており、本土壤は、31号土壤より新しく、28号土壤より古い。

規模は長軸(現存長)2.04m、短軸96cmを測る。平面形は、長方形である。主軸方位はN-83°-Wである。確認面からの深さは、20cmを測る。

#### 【30号土壤】

C区南部に位置する。F-1グリッドにあたる。29号、34号土壤と切り合い関係を有す。本土壤は

29号土壤より新しく、34号土壤より古いことが確認されている。また、30、35号土壤上層には、別の長方形土壤が存在していたことが、土層断面C-C'より確認できるが詳細は不明である。

規模は長軸(現存長)2.90m、短軸90cmを測る。平面形は、長方形である。主軸方位はN-80°-Wである。確認面からの深さは、15cmを測る。

#### 【31号土壤】

C区南部に位置する。F～G-1グリッドにあたる。29号土壤と切り合い関係を有し、29号土壤より古いことが確認されている。29号土壤に壊されているため、全体像は不明である。規模は、長軸(現存長)3.80m、短軸1.10mを測る。確認面からの深さは、20cmである。

#### 【32号土壤】

C区南部に位置する。29、30、33号土壤と重複している。33号土壤より新しく、29、30号土壤より古いことが確認されている。

規模は、長軸(現存長)2.88m、短軸1.08mを測る。確認面からの深さは、10cmである。

#### 【33号土壤】

C区南部に位置する。29、30、32号土壤と重複している。32号土壤より古く、29、30号土壤より新しいことが確認されている。規模は長軸(現存長)1.56m、短軸80cmを測る。

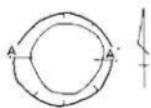
#### 【34号土壤】

C区南部に位置する。F～G-1グリッドにあたる。30、35、36号土壤、ピットとの重複関係を有し、これら土壤より新しいことが確認されている。ピット2基との重複関係は不明である。

規模は長軸4.56m、短軸1.58mである。主軸方位はN-10°-Eである。確認面からの深さは、35cmを測る。

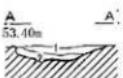
#### 【35号土壤】

C区南部に位置する。F-1グリッドにあたる。34号土壤より古いものである。規模は長軸2.40m、短軸(現存長)60cmを測る。平面形は長方形を呈する。主軸方位はN-10°-Eである。



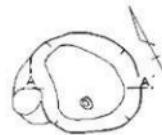
1. 暗茶褐色土 ロームブロック若干。ローム  
粒多量含む。  
2. 带黃褐色土 ロームブロック少量。ローム  
粒多量、炭化物少量含む。  
J. \* ロームブロック。ローム粒多  
量含む。

第45図 21号土壤



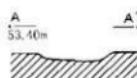
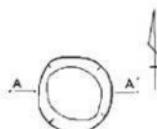
1. 明茶褐色土 ロームブロック、ローム粒着  
干含む。  
2. 带黃褐色土 ロームブロック少量含む。

第46図 22号土壤



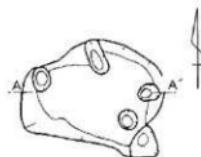
1. 明茶褐色土 ローム粒。バニス少量含む。  
2. 黄褐色土 ロームブロックを主体とする。

第47図 23号土壤



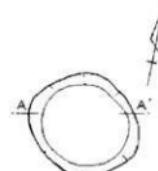
1. 暗茶褐色土 ローム粒。バニス多量含む。  
2. 带黃褐色土 ロームブロック少量含む。  
3. 黄褐色土 ロームブロック主体。

第48図 24号土壤



1. 暗茶褐色土 ローム粒。バニス多量含む。  
2. 带黃褐色土 ロームブロック少量含む。  
3. 黄褐色土 ロームブロック主体。

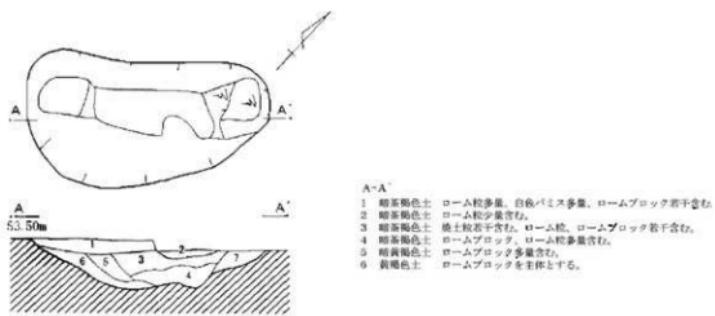
第49図 25号土壤



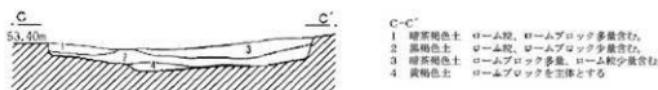
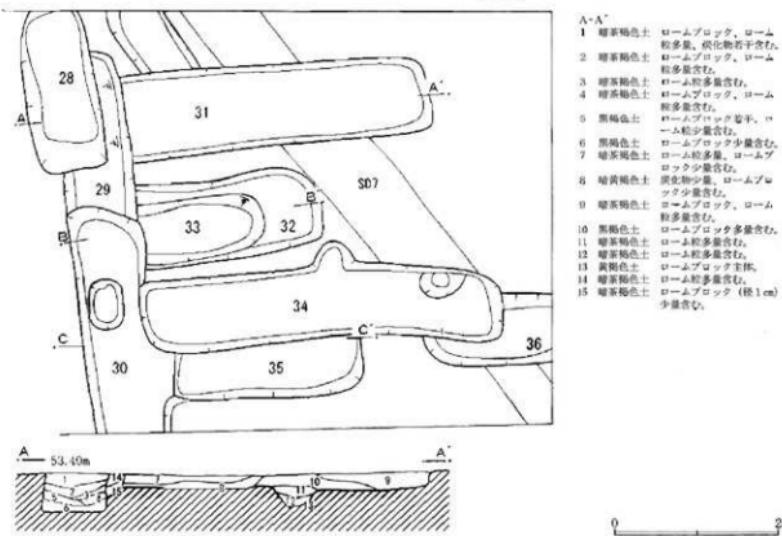
1. 暗茶褐色土 ローム粒。バニス少量含む。  
2. 带黃褐色土 ロームブロック主体。

第50図 26号土壤

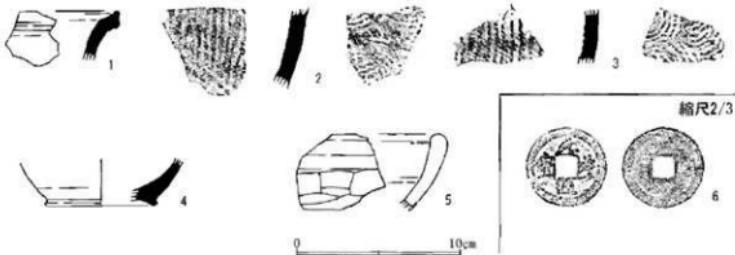
0 2m



第51図 27号土壤



第52図 28~36号土壤



第53図 土壤出土物

土壤出土物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	保存率	備考
1	甕	-	-	-	明灰色	普通	石英、長石、片岩	破片	SK-1
2	甕	-	-	-	灰白色	不良	石英、微砂粒	破片	SK-1、外縁平行、内面青海波、木野
3	甕	-	-	-	灰白色	不良	石英、長石、片岩	破片	SK-1、外縁平行、内面青海波、木野
4	高台地	-	(2.9)	(6.6)	明灰色	普通	長石、片岩、黑色粒	層厚18%	SK-4、木野
5	鉢	-	-	-	灰白色	不良	石英、角閃石	破片	SK-18、瓦質土器
6	載貨	外径(cm)	内径(cm)	内張径(cm)	外張径(cm)	厚度(cm)	重さ2.4g、材質(調査)	100%	SK-14、元意通寶(初唐年1678、北宋)

#### 【36号土壤】

C区南部に位置する。G-1グリッドにあたる。34号土壤より古い。長軸(現存長)1.62m、短軸96cmを測る。主軸方位はN-10°-Eである。

#### D. 溝跡

##### 1号溝

調査区東部に位置し、C-D-8グリッドにあたる。溝は、直線的に走行し、1号堅穴造構、3号土壤、2号溝と重複している。走行方位は、N-30°-Wである。全長14.28mにわたり検出されており、確認面からの深さは15~30cmである。

##### 2号溝

調査区東半部に位置し、D-6~9グリッドにあたる。溝は、クランク状に走行し、6~7号土壤等と切合い関係を有する。溝の東端は、調査区東部付近で確認できた。この東端部から、西コーナーまでの距離は、約28.80mであり、走行方位はN-75°-Wである。コーナー部から南北方向へほぼ直角に屈折し、4.2mにわたり走行する。その後、再び屈折し、調査区外へと延びている。

##### 3号溝

調査区西部に位置し、C-3~4グリッドにあたる。溝は直線的に走行し、4号溝と併走する形となる。土層堆積状況から、3、4号溝は、同時期のも

のか近接した時期のものと考えられる。走行方位はN-65°-Eであり、全長11.88mにわたり検出されている。確認面からの深さは30cmである。

##### 4号溝

調査区西部に位置し、C-3~4グリッドにあたる。溝は直線的に走行し、3号溝と併走する形となる。走行方位はN-65°-Eであり、全長11.58mにわたり検出されている。確認面からの深さは32cmである。

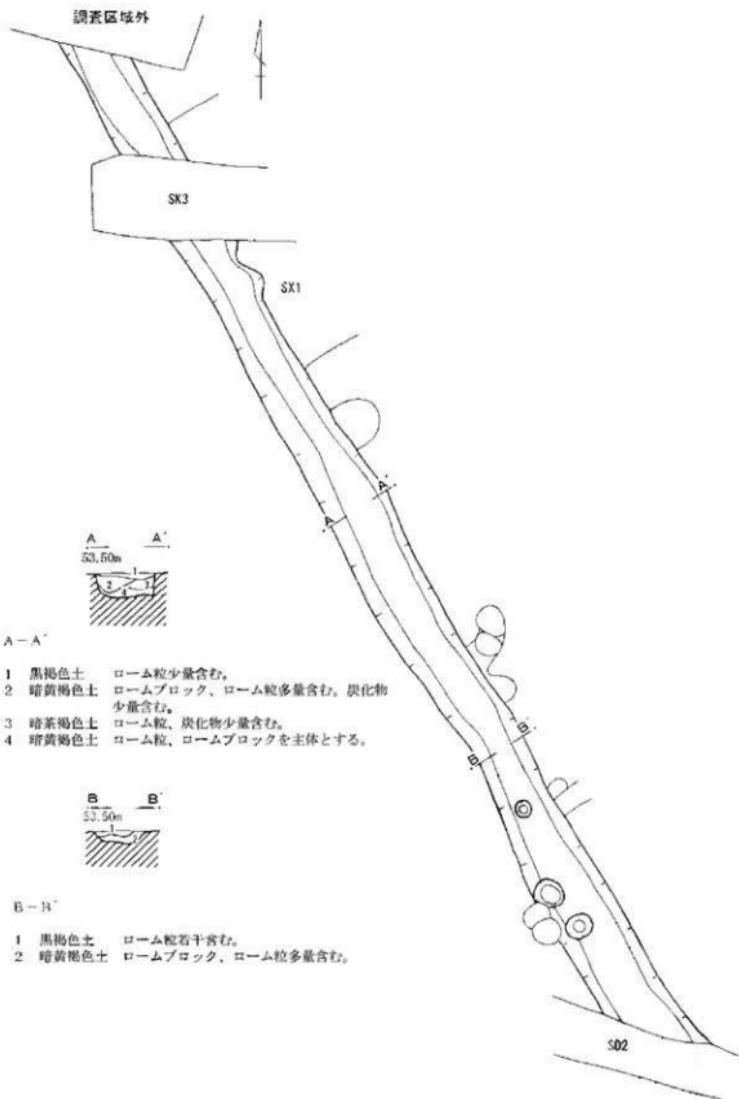
##### 5号溝

調査区西部に位置する。1号住、3~4号堅穴造構等と切合い関係を有し、溝跡の方が新しいことが確認されている。

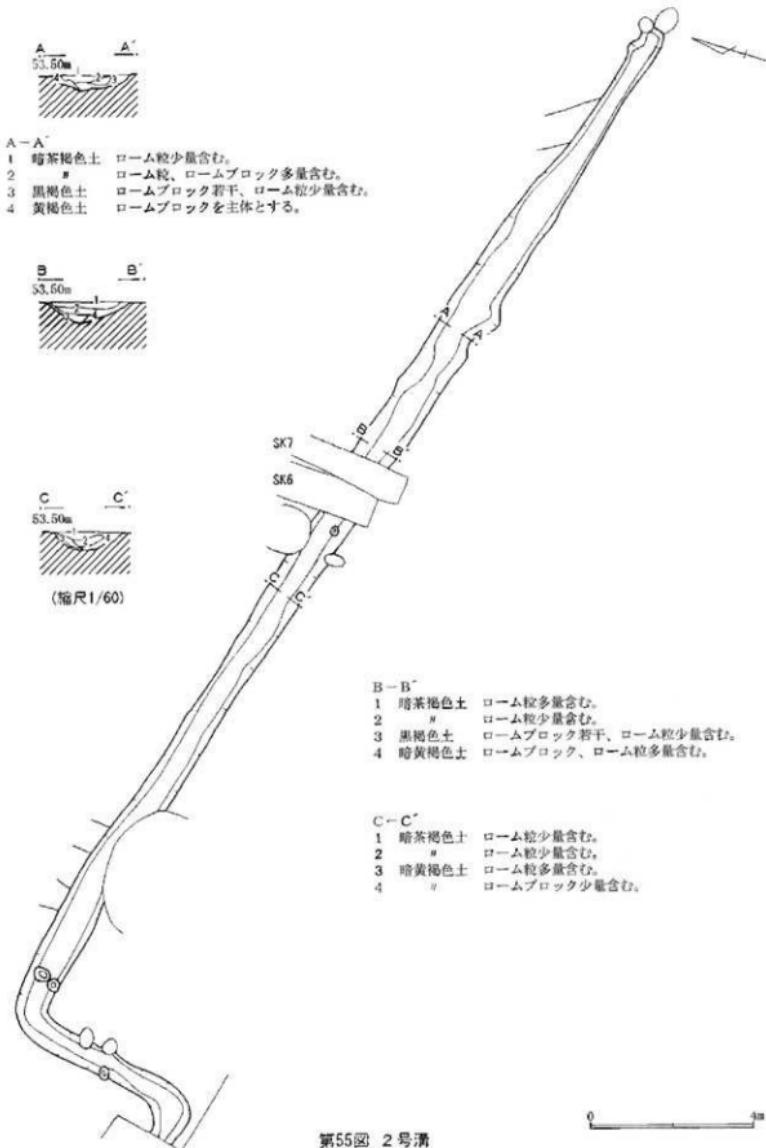
溝跡の東端は、3号堅穴造構付近で途切れており、西端は、調査区域外に伸びている。溝は、やや蛇行気味であり、全長12.90mにわたり検出されている。走行方位は、調査区東部ではN-80°-E、西部は、N-75°-Wである。

##### 6号溝

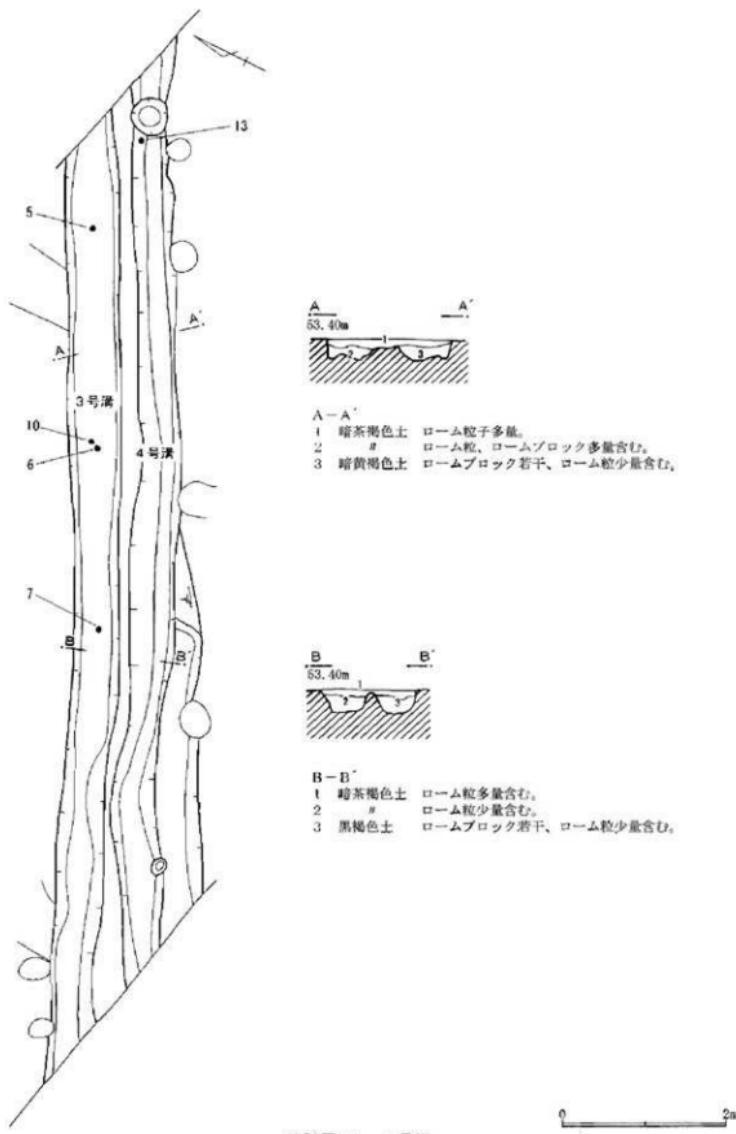
調査区中央部に位置する。15号土壤等と重複している。溝自体も土壤を連結したような形状となっている。走行方位はN-70°-Eであり、11.1mの範囲にわたり検出されている。確認面からの深さは15cmである。



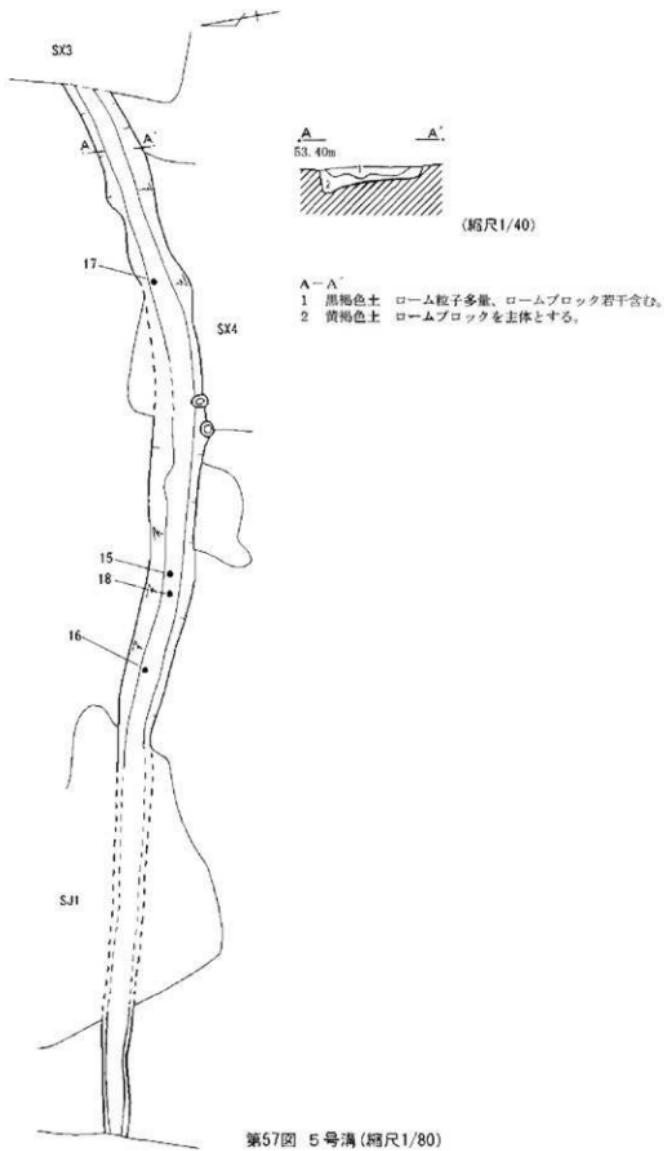
第54図 1号溝(縮尺 1/60)



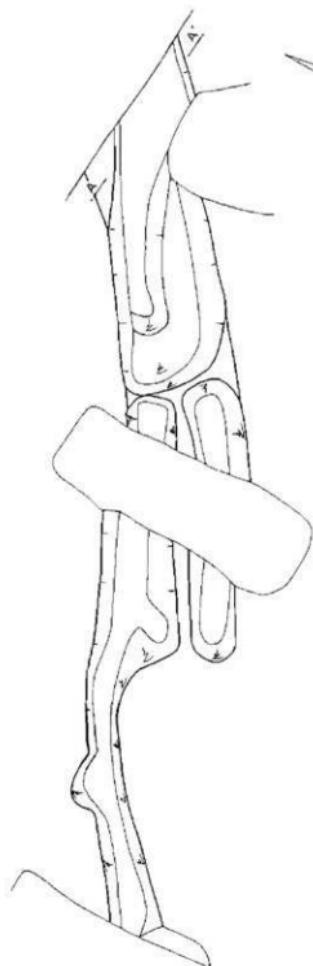
第55図 2号清



第56図 3・4号溝



第57図 5号溝 (縮尺1/80)



第58図 6号溝(縮尺1/60)

53.40m A-A'

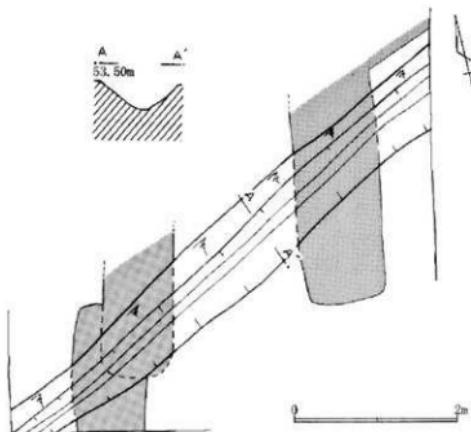


A-A'

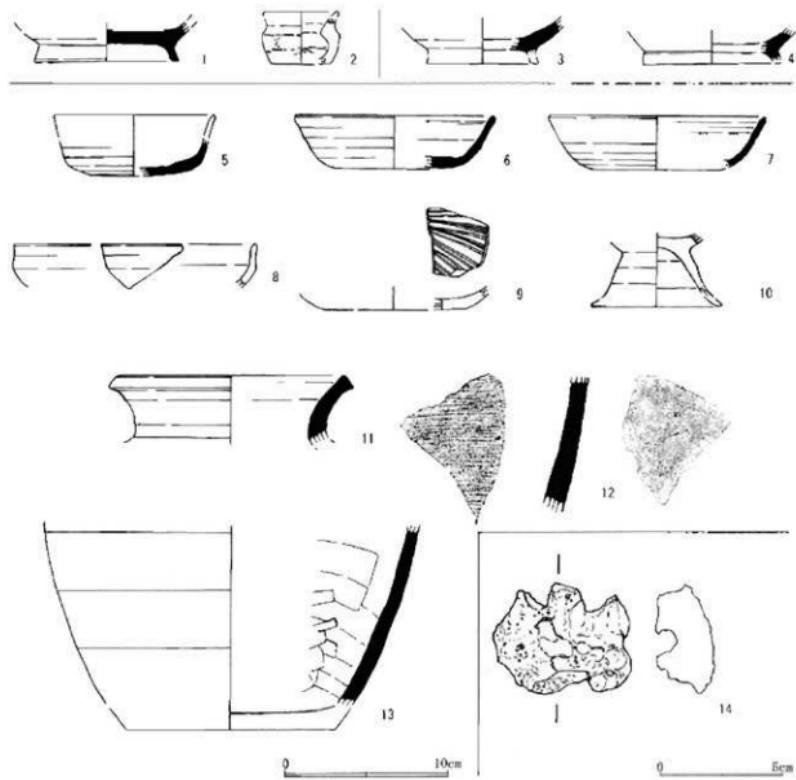
- 1 暗茶褐色土 ローム粒子多量含む。
- 2 黄褐色土 ロームブロックを主体とする。
- 3 暗黄褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量含む。

#### 7号溝

C区に位置する。F-2~G-1グリッドにあたる。31・34・36号土壤と切合い関係を有し、いずれの土壤も本溝跡の上層にのることが確認されている。全長6.75mにわたり検出された。主軸方位はN-62°-Eである。断面はV字形に近い。確認面からの深度は、約40cmである。



第59図 7号溝



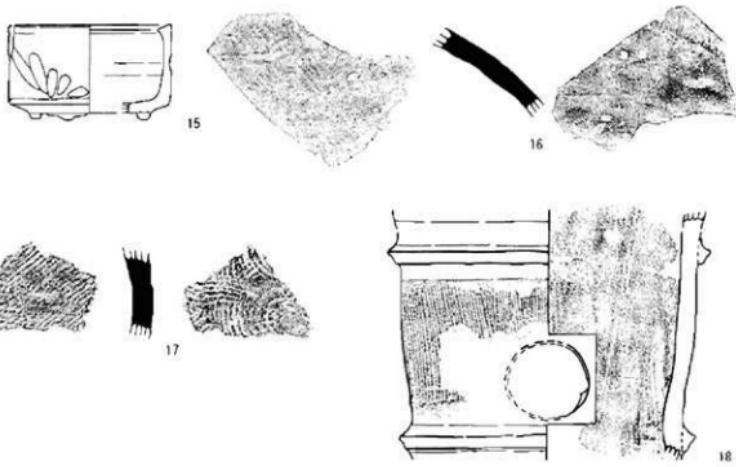
第60図 溝出土遺物 (1)

1号溝出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	高台碗	-	(2.4)	8.7	淡灰色	やや悪	石英、雲母、微砂粒	揭示50%	覆土
2	小形土器	(4.5)	(3.2)	(3.5)	灰褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	揭示30%	覆土、土二重土

2号溝出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
3	高台碗	-	(2.4)	(6.8)	明灰色	普通	石英、黑色粒、白色粒	揭示20%	覆土、末野
4	高台碗	-	(2.1)	(8.3)	明灰色	普通	黑色粒	揭示18%	覆土、末野



第61図 溝出土遺物（2）

3・4号溝出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
5	壺	-	62.43	(8.1)	明灰色	良好	石英、長石、黒色粒	図示25%	図示、底部全面凹転ヘラ削り、群馬？
6	壺	(12.1)	3.3	(7.2)	明灰色	良好	石英、長石、片岩、黒色粒	図示25%	図示、底部周辺凹転ヘラ削り、末野
7	壺	(13.1)	(3.4)	(7.8)	明青灰色	良好	石英、海綿骨針、(精良)	図示15%	図示、南北企
8	壺	(14.7)	(2.8)	-	褐色	普通	石英、鈍砂粒	図示10%	覆土
9	壺	-	61.53	(8.5)	明赤褐色	良好	石英、角閃石、(精良)	図示10%	覆土、内面放射状暗文
10	台付甕	-	63.93	-	赤褐色	普通	石英、角閃石、鈍砂粒	図示90%	図示
11	甕	(13.8)	4.47	-	暗灰色	良好	石英、長石、片岩	図示15%	覆土、末野
12	甕	-	-	-	暗灰色	普通	長石、チャート、片岩	破片	図示、外面平行叩き
13	甕	-	(11.23)	-	明灰色	良好	石英、長石、片岩	図示15%	図示
14	鉄滓	長さ 5.6cm	幅 4.6cm	厚さ 2.4cm	重さ 60.6g	磁着度 削	-	-	覆土、圓凸が目立ち、発泡している

5号溝出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
15	火照れ	(9.7)	5.9	(7.2)	緑褐色	良好	青褐色土は精良で黒色の吹き出し盛り	図示25%	図示、火照れ・陶器、瀬戸？・美濃系
16	甕	-	-	-	灰白色	普通	石英、長石、黒色粒	破片	図示、外面平行叩き後回転ナダ、末野
17	甕	-	-	-	灰色	普通	石英、長石、片岩	破片	図示、外面平行叩き。内面青滑波

番号	種別	色調	焼成	胎土	外面調整	内面調整	残存率	備考
18	円筒	橙褐色	普通	石英、長石、角閃石、パミス	縦ハケ 6本/cm	横ハケ 4本/cm + ナダ	図示15%	図示

## IV お手長山古墳の調査

### (1) 発掘調査・確認調査の経緯

お手長山古墳は、岡部町指定文化財（史跡）として昭和54年度指定を受けている。旧棟沢郡域では、寅稻荷塚古墳と並ぶ大型の古墳として知られてきた。墳丘の一部は大きく削平されており、墳形について、不明な部分が多くあった。また、地元の伝承では、墳丘削平の際、銅鏡の出土があったとされるが、その所在は明確ではない。

町の史跡指定に先立つ昭和50年には、本庄高等学校考古学部による墳丘測量調査成果が報告されており、学術的検討がなされた。

昭和63年度には、古墳南方に個人住宅の建設が予定され、これに先立ち周溝の一部の発掘調査が実施されている。

発掘調査では、後円部の状況が明らかとなった。また、この際、周溝からは土師器甕、須恵器破片等が出土している。

その後、平成2年度に社員寮建設に伴う熊野遺跡立堀地区（発掘調査時は立堀遺跡）の発掘調査が実施されることとなったが、開発予定地には、お手長山古墳の周溝が延びていることが確定であり、詳細な状況を把握するため、土地所有者である新神戸電機株式会社の協力を得、町教育委員会による確認調査を実施することとなった。

確認調査は、熊野遺跡立堀地区の調査と併行して実施した。調査期間は、平成2年11月1日～平成2年12月27日である。お手長山古墳周溝付近に第1～第3トレンチを設定し、周溝の状況を確認した。

### (2) 発掘調査・整理報告書作成の経緯

お手長山古墳の発掘調査は、昭和63年5月1日～5月15日にかけて実施された。発掘調査は、重機による表土の除去から行った。表土除去後、遺構の確認を実施した。確認の結果、縄文時代の住居跡1軒及びお手長山古墳周溝が検出された。

その後、お手長山古墳周溝の覆り下げを実施した。周溝内には、土師器・須恵器・石室の残骸と推定される角閃石安山岩が比較的まとまって出土した。縄文時代の住居跡からも縄文土器1個体が床面上から検出されている。

整理・報告書作成については、昭和63年度の調査以後、岡部町史一原始・古代資料編等で、成果

の一部を掲載していたが、平成18年4月1日より本格的に開始した。出土遺物の水洗・注記・接合・実測作業は、昭和63年度中に終了しており、遺構図の整理作業から着手した。その後、トレース・執筆作業等を順次行い、平成18年12月28日に、そのすべてが終了した。その後、印刷会社との契約を締結し、報告書刊行がなされたのは、平成19年2月28のことであった。

### (3) 昭和63年度の発掘調査で発見された遺構と遺物

#### 【お手長山古墳周溝】

お手長山古墳周溝は、後円部のうち約16%が検出された。確認面からの深さは60cm～80cmである。周溝底面及び立ち上がり部分にかけてピット、土壙が検出されている。古墳に伴うものと推定されるが、その性格については不明である。

周溝の立ち上がりは、内周部分は比較的緩やかで若干の段差を有す。外周部分はやや急である。

また、外周付近には、2箇所の攪乱が存在しており、遺構の一部が壊されていた。

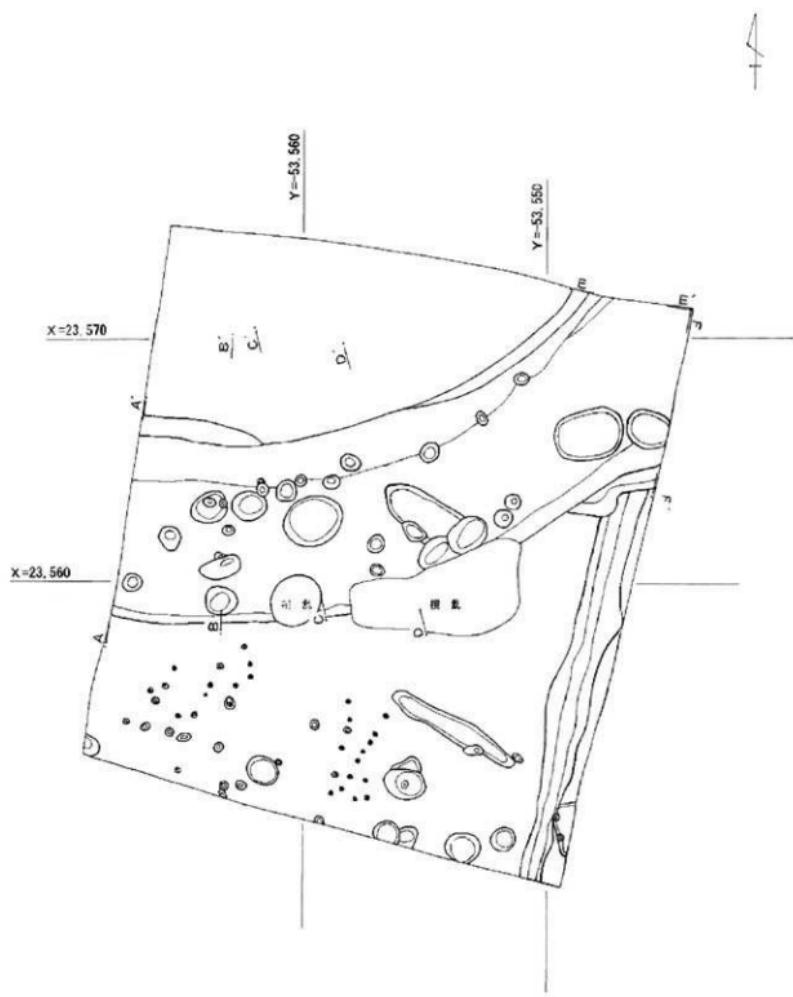
旧表土については、土層断面を見る限り確認できなかった。この点については、発掘調査直前まで耕作がなされていたことによるものであろう。

出土遺物については、古墳時代～近世に至るまで年代幅のある遺物が出土している。図示しなかったが、周溝内より角閃石安山岩が比較的まとまって出土している。

#### 【その他の遺構】

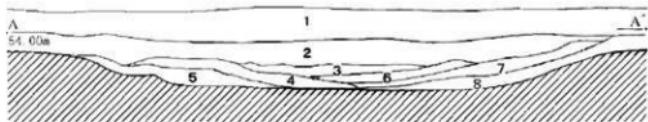
その他の遺構として縄文時代の住居跡1軒が検出されている。遺存状態は悪く、柱穴及び炉跡が確認されたのみであった。炉跡周辺から出土した縄文土器片から諸磧a期頃の所産と推定される。炉跡は、地床炉である。

また、周溝外側に土壙、溝跡等が検出された。これらの遺構については、覆土等の状況から近現代の所産と考えられる。



第62図 古手長山古墳発掘調査全測図（昭和63年度調査）

0 5m

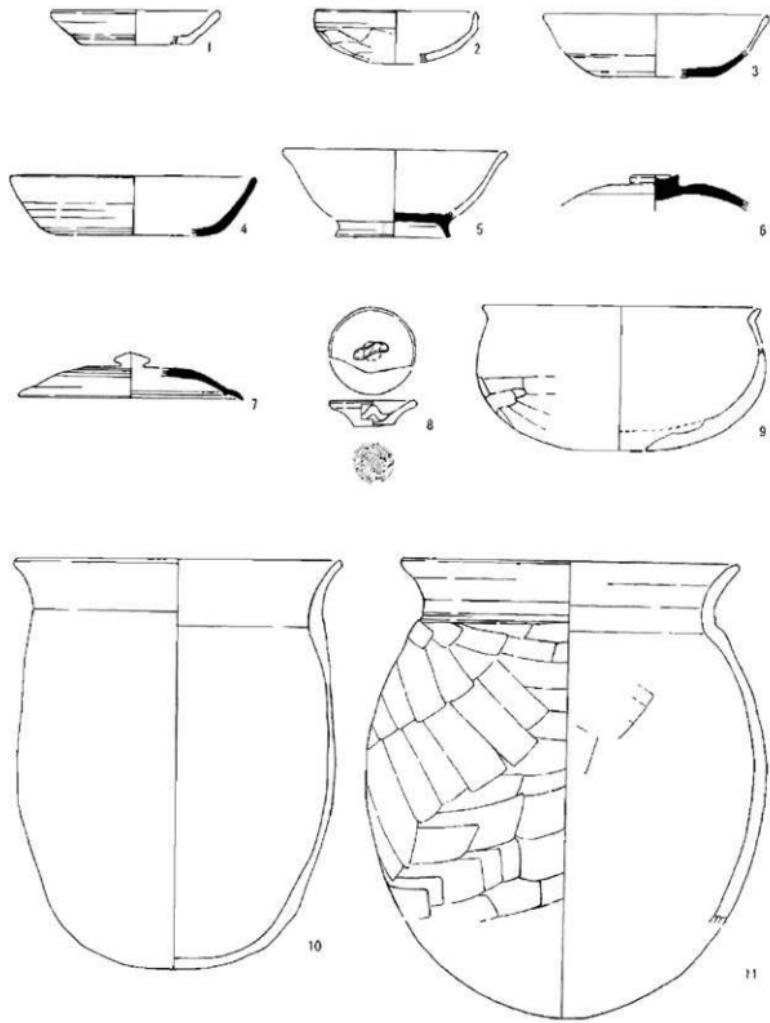


- 1 茶褐色土 ローム粒子、ロームブロック、浅間A凝石少量含む。  
 2 暗茶褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量含む。  
 3 黄褐色土 ロームブロック主体。粘性あり。  
 4 褐褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック若干含む。  
 5 暗茶褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む。  
 6 黑褐色土 ローム粒子多量含む。  
 7 暗黄褐色土 ローム粒子、ロームブロック若干含む。  
 8 暗黄褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量含む。

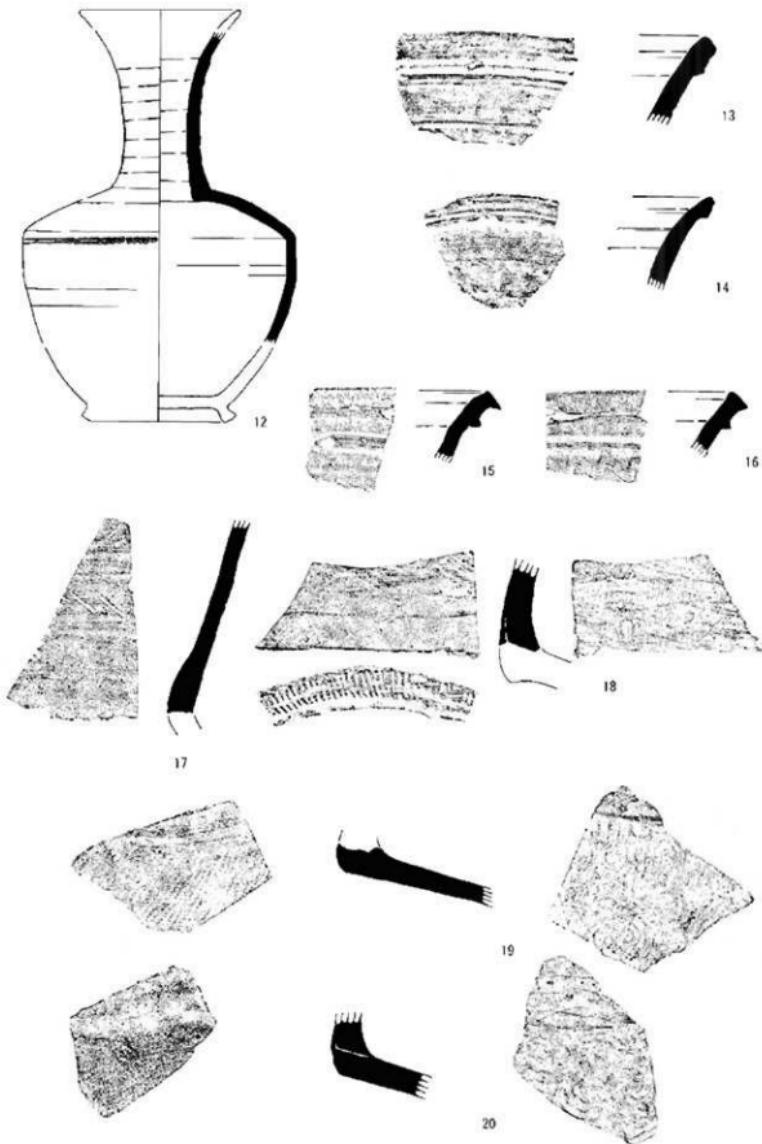


0 2m

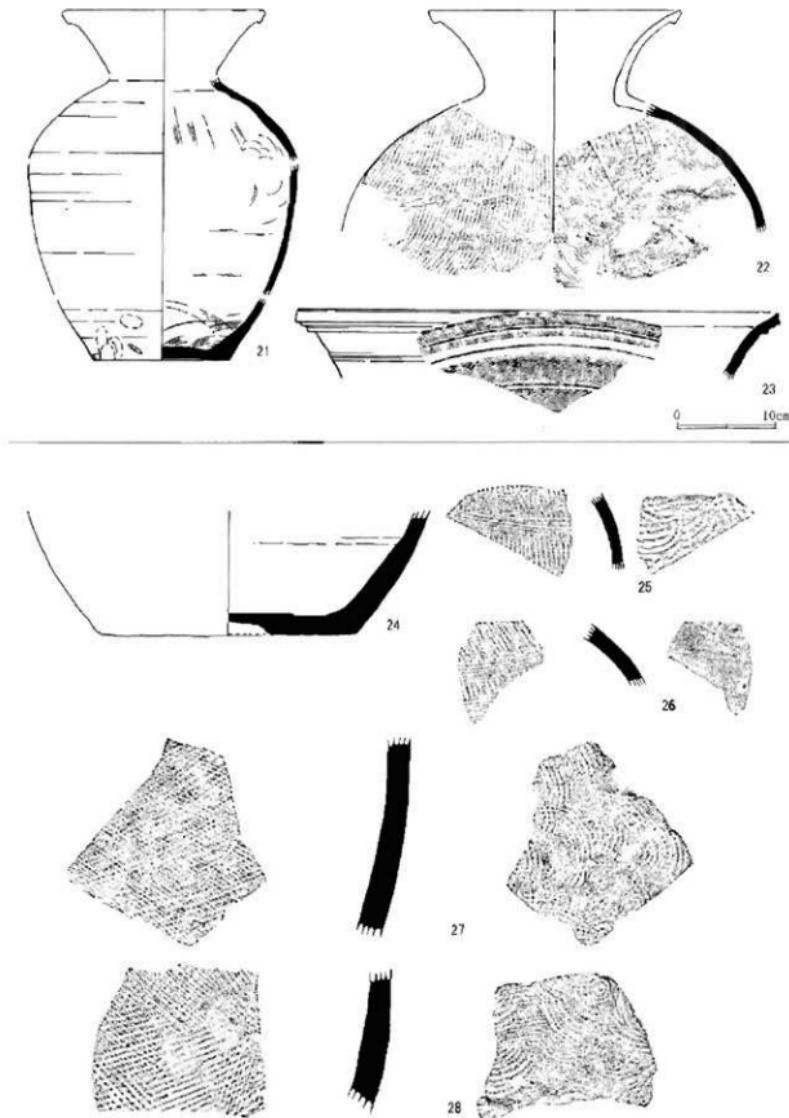
第63図 お手長山古墳土層断面図・エレベーション図



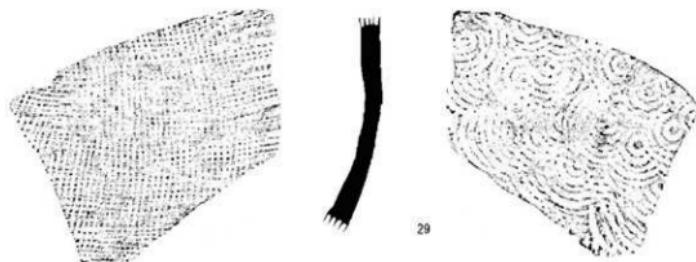
第64図 お手長山古墳周溝出土遺物（昭和63年度調査） 0 10cm



第65図 お手長山古墳周溝出土遺物（昭和63年度調査） 0 10cm



第66図 お手長山古墳周溝出土遺物（昭和63年度調査） 0 10cm



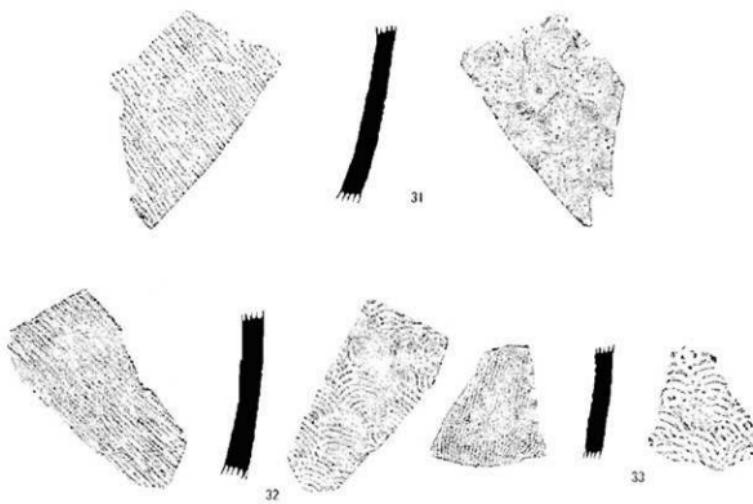
29

30

31

32

33



第67図 お手長山古墳周溝出土造物（昭和63年度調査） 0 10cm

岡津出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	小皿	(10.0)	2.1	(6.8)	黄褐色	やや悪	石英、角閃石、褐色粒	固示25%	覆土、土師質土器、回転糸切り未調整
2	坪	(9.7)	(3.3)	-	茶褐色	良好	石英、角閃石	固示25%	覆土
3	坪	-	(1.7)	(7.0)	灰色	普通	石英、長石、黒色粒	固示15%	覆土、回転糸切り未調整、末野
4	坪	(15.0)	3.7	(9.1)	明灰色	普通	石英、長石、チャート、 繊維骨針	固示25%	覆土、底部回転糸切り、南北企
5	高台輪	-	(1.6)	6.9	暗灰色	普通	石英、長石、片岩	固示50%	覆土、末野
6	蓋	-	(2.3)	-	黄褐色	不良	石英、長石、チャート、片岩	固示40%	覆土、磨滅あり
7	蓋	(13.7)	(1.9)	-	明灰色	普通	長石、黒色粒	固示70%	覆土、末野
8	蓋?	5.1	1.6	2.5	灰黄褐色	良好	測定土は精良、堅硬	固示70%	覆土、内面に取っ手、自然釉微量
9	甕	-	(6.6)	-	黄灰～灰黑	やや悪	砂粒、ペニス多量(ザラツ く)	固示30%	覆土、剥離及び磨耗あり
10	甕	(19.9)	25.5	-	明褐色	やや悪	石英、角閃石、砂粒	固示25%	覆土、磨滅が著しい
11	甕	(20.5)	(22.1)	-	茶褐色	普通	石英、角閃石、長石、砂粒	固示25%	覆土
12	長頸壺	-	(19.3)	-	灰色	良好	石英、片岩、長石粒多量(粗 目)	固示30%	覆土、肩部に縦目1条、末野
13	甕	-	-	-	灰褐色	普通	石英、長石、片岩	破片	覆土、外側に沈線、末野
14	甕	-	-	-	明灰色	普通	石英、長石、片岩	破片	覆土、磨滅あり、末野
15	甕	-	-	-	灰色	普通	石英、長石、片岩	破片	覆土、波状文繊維6本、木野
16	甕	-	-	-	灰色	普通	石英、長石	破片	覆土、波状文繊維6本、末野
17	甕	-	-	-	暗灰色	良好	石英、長石、片岩	破片	覆土、外側に斜位の繊維文、末野
18	甕	-	-	-	灰褐色	良好	石英、長石、片岩	破片	覆土、平行叩き、近接合縫に頂き板
19	甕	-	-	-	灰褐色	良好	長石、白色粒	破片	覆土、外側平行、内面青海波
20	甕	-	-	-	灰色	良好	長石、片岩	破片	覆土、外側回転ナガ、底部錐な手持
21	甕	-	(29.0)	(14.0)	灰色	普通	石英、長石、片岩	固示15%	覆土
22	甕	-	(13.5)	-	淡黄褐色	不良	長石、片岩、黒色粒	固示15%	覆土、平行+斜位ナガ、内面青海波
23	甕	(19.4)	(7.0)	-	灰色	普通	石英、長石、片岩	固示10%	覆土、波状文繊維10本、末野
24	甕	-	(7.7)	(15.6)	灰白色	不良	石英、長石、片岩、チャート	固示40%	覆土、磨滅が著しい
25	甕	-	-	-	灰色	普通	長石、片岩	破片	覆土、外側平行+横ハケ、内面青海波
26	甕	-	-	-	褐色	良好	長石、片岩	破片	覆土、外側平行+横ハケ、内面青海波
27	甕	-	-	-	灰色	良好	石英、長石、片岩	破片	覆土、外側平行、内面青海波、末野
28	甕	-	-	-	灰～橄褐色	普通	石英、長石	破片	覆土、未達元、外平行、内面青海波
29	甕	-	-	-	暗灰褐色	良好	石英、長石、片岩	破片	覆土、外側平行、内面青海波、末野
30	甕	-	-	-	褐色	普通	石英、長石、片岩	破片	覆土、外側平行、内面青海波、末野
31	甕	-	-	-	暗灰色	良好	長石、片岩、堅壁	破片	末野
32	甕	-	-	-	暗灰色	普通	石英、長石、片岩	破片	覆土、外側平行、内面青海波、末野
33	甕	-	-	-	明灰色	良好	長石	破片	覆土、外側平行、内面青海波、末野

(4) 平成2年度の確認調査で発見された遺構と遺物

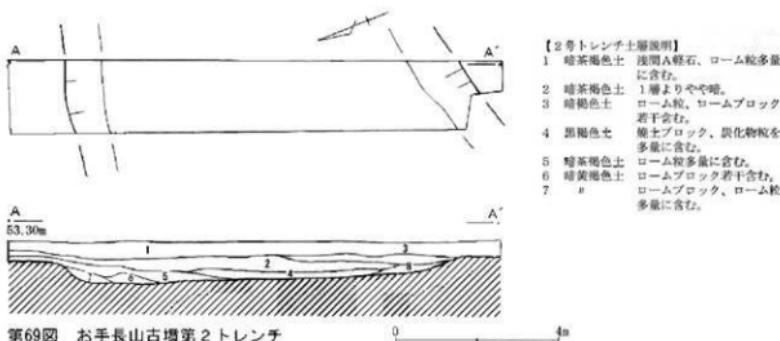
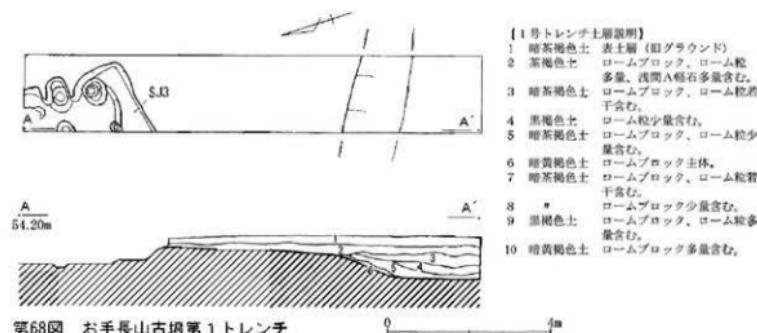
【第1トレンチ】

お手長山古墳後円部周溝外周の確認を行うために設定したトレンチである。調査では、予想どおり周溝外周の立ち上がりを確認することができた。トレンチは、幅2.0m、長さ11.4mにわたる。表土から確認面までは、重機による掘削である。

トレンチ内には、周溝の他、竪穴住居跡1軒が

検出されている。この竪穴住居跡は、熊野遺跡（立堀地区）3号住居跡として取り扱う。当住居跡からは、9世紀後半の土師器・須恵器類が多量に出土している。

周溝は、地表下15~30cmのソフトローム面において確認されている。確認面からの深さは、40cmである。外周の立ち上がりは緩やかである。周溝内からの出土遺物は、土師器・須恵器等であるが、いずれも古墳築造時のものとは異なる。



### 【第2トレンチ】

お手長山古墳後円部の規模と周溝外周の確認を行うために設定したトレンチである。トレンチは、幅2m、長さ12.5mにわたる。表土から確認面までは重機による掘削である。

トレンチ内では、周溝内周・外周それぞれの立ち上がりを確認することができた。周溝は、地表下40~50cmのソフトローム面において確認されている。内周・外周ともに立ち上がりは緩やかであり周溝底面は、墳丘側の方がやや浅くなっている。

トレンチ設定は、括れ部付近を想定したものであったが、後円部径が予想に反して大きく、想定した箇所とは異なるものであった。

出土遺物は、土師器・須恵器等であるが、いずれも古墳築造時のものとは異なる。

### 【第3トレンチ】

お手長山古墳前方部の状況を確認するためのトレンチである。ほぼL字形に設定した。トレンチの規模は、南北方向で長さ15.6m、東西方向で長さ12.24mであり、幅2mである。表土から確認面までは、重機による掘削である。

トレンチ内では、前方部北コーナーの状況を確認することができた。コーナー部には、長軸3.9m(東西)、短軸2.5m(南北)の長方形の突出部が付随することが明確となった(短軸については北限が確認できなかったため推定値である)。この突出部は、前方部から一段低くなっている。周溝は、地表下40~50cmのソフトローム面において確認されている。

周溝は、南北方向のトレンチでは、比較的急傾斜をもって立ち上がり、東西方向では緩やかな傾斜である。底面は比較的平坦である。

出土遺物は、土師器・須恵器等であるが、いずれも古墳築造時のものとは異なる。

### (5) 発掘調査・確認調査から推定されるお手長山古墳の規模と年代

昭和63年度の発掘調査・平成2年度の確認調査により、墳丘の形状及び周溝の状況等が、ほぼ確定した。これらの調査成果によれば、後円部径37m、前方部長12.5m、計49.5mの後円部の短い帆立貝式古墳であることが判明し、現存する墳丘から想定される墳形とは大きく異なるものであった。これらの規模から、当古墳は、旧棲浜郡域において6世紀後半代の築造と推定される寅幡荷塚古墳に次ぐ規模を有することが明確となった。

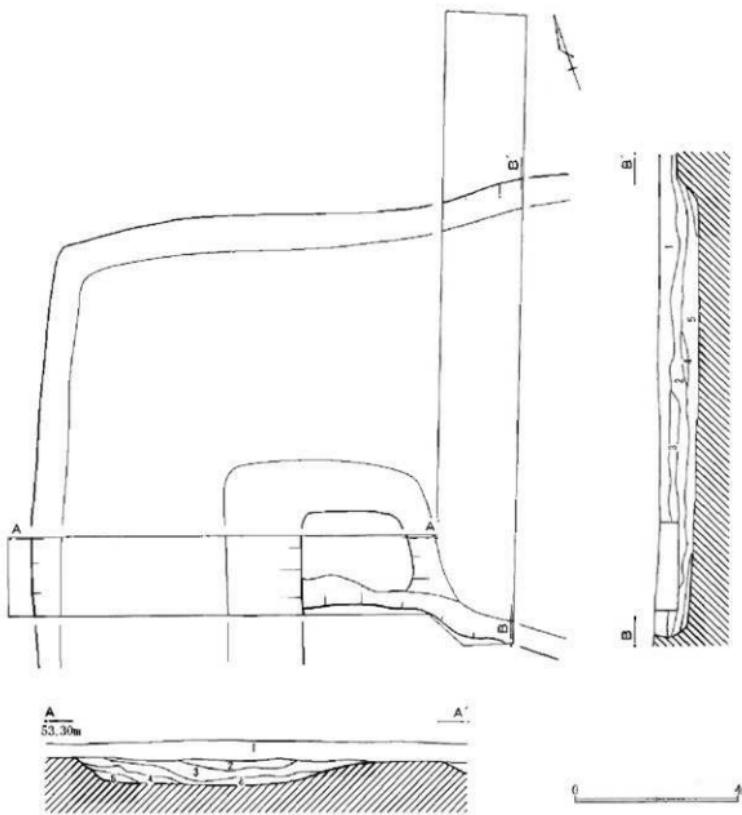
出土遺物については、時期を明確に確定するものは少ない。古墳時代後期の遺物としては、第64団Na10の土師器甕等が該当する。また、埴輪については、発掘調査・確認調査あわせて皆無であった。のことから、本古墳については、埴輪を伴わない時期のものと判断した。

また、石室の殘骸と推定される角閃石安山岩が現在も散乱していること、銅鏡出土の伝承があること、埴輪が樹立されないこと等を勘案すると、6世紀末~7世紀初頭頃の古墳と想定する。

周溝から出土した遺物については、その多くが7世紀末~中世にかけての所産であり、古墳築造を示す遺物とは考えられず、周辺の住居跡等からの流入か、古墳築造後、墳丘周辺で行われた行為によるものと推定されるのである。

また、当古墳に近接する熊野遺跡(立堀地区)1号住居跡は、住居跡自体の時期は、古墳築造時期とはかけ離れているものであるが、カマド補強材として使用されている埴輪は注目に値する。

これらの埴輪については、発掘調査・確認調査において埴輪の出土がみられないことから、お手長山古墳に樹立されたものというより、周辺古墳から採取されたものと考えている。



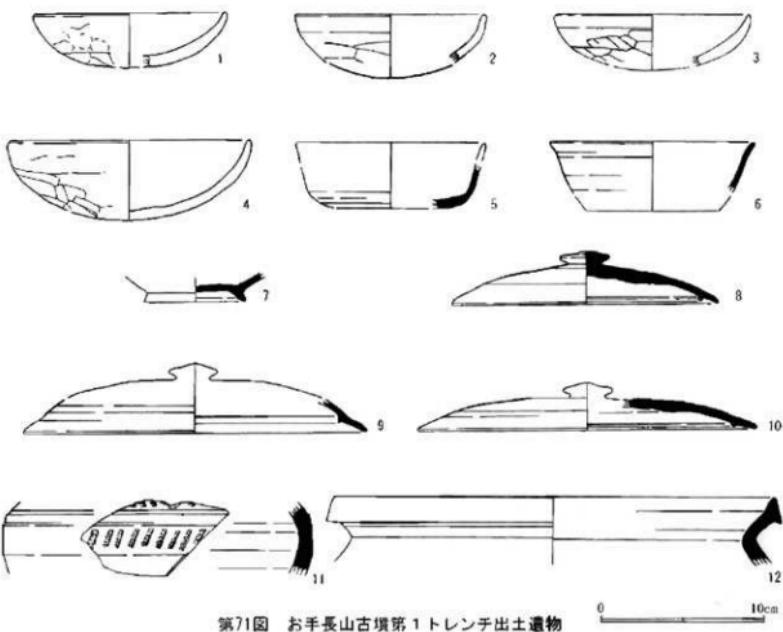
第70図 お手長山古墳第3トレンチ

【A-A'土層説明】

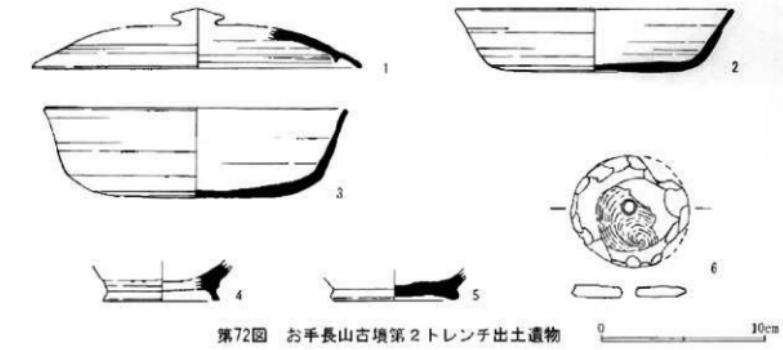
- 1 喀茶褐色土 表土層 (旧グラウンド)
- 2 黒褐色土 ローム粒少量、施土粒若干含む。
- 3 ■ ローム粒少量、2層より色調暗。
- 4 ■ ■ ロームブロック少量含む。
- 5 喀茶褐色土 ロームブロック主体。
- 6 茶褐色土 ロームブロック主体。
- 7 喀茶褐色土 ロームブロック、ローム粒少量含む。

【B-B'土層説明】

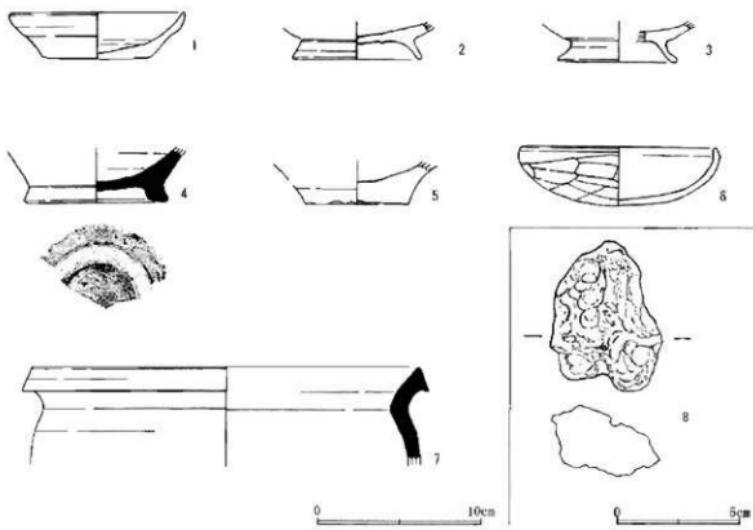
- 1 喀茶褐色土 深闊A軽石、ローム粒多量含む。
- 2 喀茶褐色土 2層よりやや暗。
- 3 喀茶褐色土 ローム粒、ロームブロック若干含む。
- 4 黒褐色土 施土ブロック、炭化物を多量に含む。
- 5 ■ ローム粒多量含む。軟質。
- 6 喀茶褐色土 ロームブロック若干含む。
- 7 ■ ロームブロック、ローム粒多量含む。



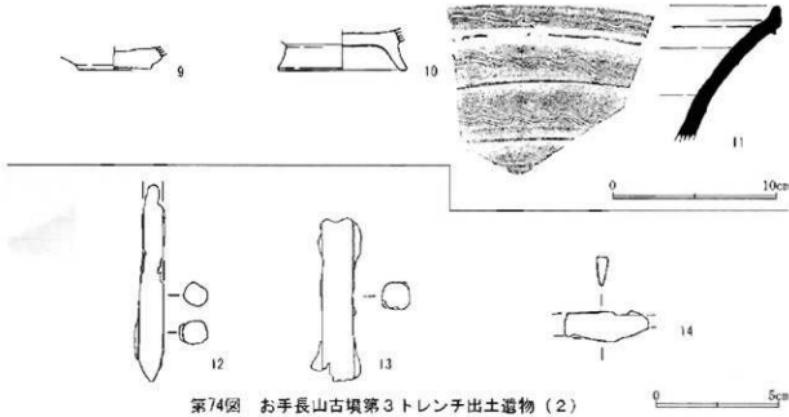
第71図 お手長山古墳第1トレンチ出土遺物



第72図 お手長山古墳第2トレンチ出土遺物



第73図 お手長山古墳第3トレンチ出土遺物（1）



第74図 お手長山古墳第3トレンチ出土遺物（2）

第1トレンチ出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	壺	(11.7)	3.3	-	褐色	普通	石英、角閃石	図示25%	図示
2	壺	(11.6)	3.9	-	茶褐色	良好	石英、角閃石、(鈍良)	図示20%	一括
3	壺	(11.8)	(3.5)	-	灰褐色	普通	石英、長石、角閃石	図示20%	図示
4	壺	(14.7)	4.9	-	暗褐色～茶褐色	普通	石英、角閃石、白色粒	図示40%	一括
5	壺	-	(2.8)	(8.9)	明灰色	良好	石英、長石	図示10%	図示、底部無調整、末野
6	壺	(12.6)	(3.3)	-	明灰色	良好	石英、長石、黑色粒	図示10%	一括、末野
7	高台壺	-	(1.8)	(6.1)	明灰色	普通	石英、長石、片岩、酸化鉄粒	図示15%	図示、末野
8	蓋	(16.2)	3.3	-	明灰色	普通	石英、長石、片岩	図示20%	一括、末野、錠は擬定床
9	蓋	(21.1)	(2.1)	-	明灰色	良好	石英、片岩	図示25%	図示、末野
10	蓋	(20.6)	(1.9)	-	淡灰色	良好	石英、片岩、黑色粒	図示20%	図示、末野
11	ハソウ	-	(4.6)	-	明灰色	良好	石英、長石、黑色粒	図示10%	一括、繩状工具の押し引き文
12	鉢	(27.0)	(4.2)	-	淡灰色	良好	石英、長石、片岩	図示10%	一括、末野

第2トレンチ出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	蓋	(19.7)	(2.5)	-	淡灰色	良好	石英、長石、片岩	図示10%	図示、末野
2	壺	(16.8)	3.8	(12.4)	淡褐色	良好	石英、長石、片岩、銀色粒	図示30%	図示、裏面全面削りヘラ削り、東野
3	壺	(18.2)	5.4	(15.5)	灰白色	不良	石英、長石、砂粒	図示30%	一括、裏面全面削りヘラ削り、末野
4	高台壺	-	(2.5)	(7.0)	明灰色	不良	微鉄粒、酸化鉄粒	図示10%	一括、末野
5	高台壺	-	(1.9)	(7.2)	灰白色	やや悪	長石、片岩	図示20%	一括、末野
6	筋鉢	長さ 6.9cm	幅 7.1cm	厚さ 0.7cm	明灰色	良好	石英、長石、海綿骨針	80%	一括、須恵壺の底部を軽用、南北企

第3トレンチ出土遺物観察表(1)

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	小瓶	10.7	2.8	6.6	明褐色	普通	石英、微砂粒、酸化鉄粒	図示90%	周溝内、土師質、回転糸切り未調整
2	高台壺	-	(2.35)	(7.7)	灰褐色～灰黒	やや悪	石英、角閃石、バミス、酸化鉄粒	図示40%	周溝内、土師質、内面黒色處理
3	高台壺	-	(2.6)	(7.1)	褐色	やや悪	石英、長石、砂粒	図示30%	周溝内、土師質、質感あり
4	長頸瓶	-	(3.4)	(8.8)	淡灰色	良好	長石、漂白	図示25%	周溝内、底部にヘラ記号。群馬産?
5	鉢?	-	(2.7)	6.3	灰褐色	普通	石英、雲母、微砂粒(精良)	図示95%	図示、土師質、回転糸切り未調整
6	壺	(11.8)	3.6	-	灰褐色	不良	石英、角閃石、砂粒(粗い)	図示90%	周溝内+1トレ内、歪みあり
7	鉢	(23.7)	(6.2)	-	明灰色	普通	石英、長石、片岩、黑色粒	図示10%	図示、末野
8	鉢	長さ 6.2cm	幅 4.6cm	厚さ 3.0cm	重さ 98.1g	礎着度 弱	-	-	一括、棄窓、回凸が目立つ

第3トレンチ出土遺物観察表(2)

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
9	小瓶	-	(1.45)	4.4	灰褐色	普通	石英、雲母。(精良)	図示80%	図示、土師質、回転糸切り未調整
10	高台壺	-	(2.5)	(7.8)	明褐色	やや悪	石英、角閃石、酸化鉄粒、微砂粒	図示90%	図示、土師質
11	甕	-	-	-	明灰色	良好	石英、片岩	破片	図示、波状文5~7条・4段、末野
12	鉢?	長さ 8.0cm	幅 1.9cm	厚さ 1.0cm	重さ 12.8g	-	-	破片	一括、先端部尖る
13	不明鉄製品	長さ 6.7cm	幅 1.3cm	厚さ 1.1cm	重さ 25.6g	-	-	破片	一括、亀裂が著しい
14	刀子	長さ 3.5cm	幅 1.2cm	厚さ 0.4cm	重さ 5.4.2g	-	-	破片	一括、刃部と茎部先端部欠損

## V まとめ

### (1) 熊野遺跡立堀地区の調査

本調査では、A～C地点において、遺構・遺物が検出されている。

古代の主要遺構として堅穴住居跡3軒がある。

1号住居跡は、A地点の調査区西端に位置する。出土した遺物は、土師器・須恵器の他に埴輪片がカマドの補強材として使用されていた。

土器類は、年代幅が広く堅穴住居跡の年代は、明確ではないが、9世紀末～10世紀前半を想定する。

また、カマドの補強材として使用された埴輪は、貼付口縁を有する特徴的なものである。この種の埴輪は、前橋市綿貫觀音山古墳、同金冠塚古墳、藤岡市七輿山古墳など上毛野方面に散見される。

さらに、本住居跡出土の埴輪の胎土に共通するのは、角閃石安山岩を混入するという点である。主に上毛野から武藏北部の利根川流域に分布する一群であり、以上の点から埴輪が樹立された古墳被葬者は、上毛野方面との強い関連性を窺うことができる。当住居跡出土の埴輪が樹立された古墳については明確ではないが、角閃石安山岩の混入から6世紀後半以降の年代が想定されるものである。近接するお手長山古墳もその候補となるが、2次にわたる周溝の調査では埴輪が全く検出されなかつたこと、現在においても埴輪の採集ができないこと等を考慮した場合、その可能性は低いものと考える。

2号住居跡からは比較的まとまった遺物が出土しており、土師器・須恵器・鉄製品・砥石等がある。土師器坏は、底部平底のものが主体であり、底部の縮小傾向、体部が大きく開く等の特徴から、富田編年Ⅷ期に該当するものである。また、体部が大きくへら削り調整されるNo.1、3等の存在は北武藏型坏の型式組列の最終段階に近いものであろう。土師器壺は、前段階に比較しこの字の形態が崩れ気味となっている。須恵器高台壺は、ほぼ末野産であり、土師器の年代観と離れてはいない。

3号住居跡は、お手長山古墳第1トレンチで確認された住居跡である。土師器坏・壺・須恵器壺・甕等が出土している。それぞれの器種の形態等から2号住居跡に近い年代が想定される。

### (2) お手長山古墳の発掘・確認調査

お手長山古墳の調査は、昭和63年の発掘調査・平成2年の確認調査と2次にわたる調査において墳形が確定した。これらの調査成果によれば、後円部径37m、前方部長12.5mの「帆立貝式古墳」であることが明確となった。また、先述したように埴輪を伴わない古墳であること等を考慮した場合、7世紀前後の年代を想定してよいであろう。

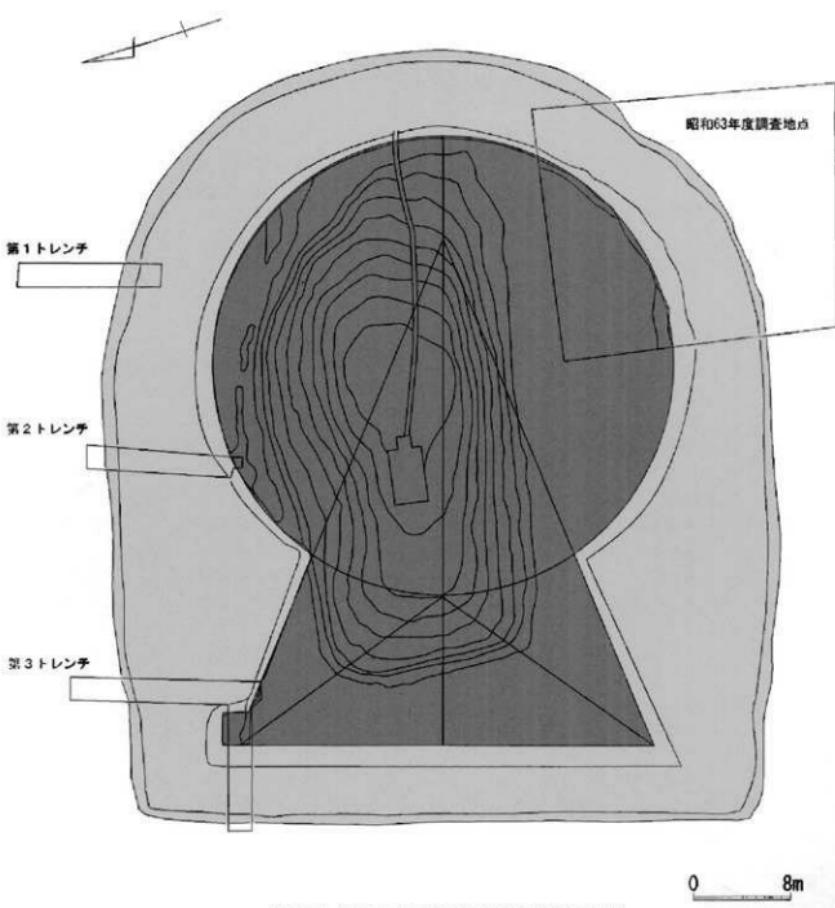
周溝覆土からは、多量の土師器・須恵器類が出土したが、明らかに時代の異なるものが多く、古墳築造段階の遺物については明確ではない。この点は、当古墳周辺で、祭祀等が後世において行われていた可能性を暗示するものである。

備後台地北縁部の古墳に関する発掘調査は、昭和63年度のお手長山古墳を嚆矢とし、僅かながらであるが、進展しつつある。この間、熊野・中宿遺跡をはじめとする棟沢評・郡家闇遺跡群の調査も実施し、古墳時代から律令期への移行について論じる土台が整いつつあることは、旧岡部町時代からの発掘調査の大きな成果と言えるであろう。

本地域の首長墓の変遷は、横矧板銀留短甲・五鉢付鏡板を出土した四十塚古墳築造(5世紀末頃)以降から明確化する。その後、6世紀後半に寅稻荷塚古墳(前方後円墳51m)、7世紀前後の時期にお手長山古墳(帆立貝式古墳49.5m)、7世紀前半代に内出八幡塚古墳(円墳33m)、7世紀中頃に愛宕山古墳(方墳37m)という変遷を迎える。

このような伝統的な首長墓の系譜を辿れる地域は、棟沢郡域では、当地域のみであり、古墳時代首長の伝統的勢力基盤のものとに、棟沢評・郡家が成立することが考えられるものである。

今後、当地域における有力古墳の内容について、さらに確認作業を行い、より綿密な首長墓系列を調査することが大きな課題となろう。



第75図 お手長山古墳墳丘測量図(縮尺1/400)

写 真 図 版

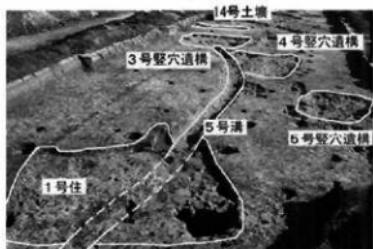
図版 1



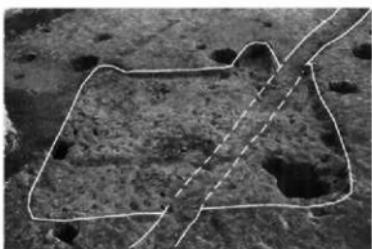
A区全景



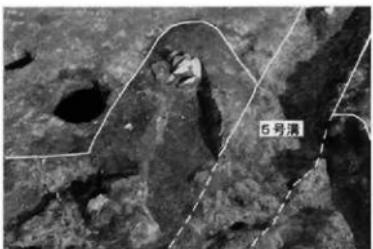
調査風景（南より）



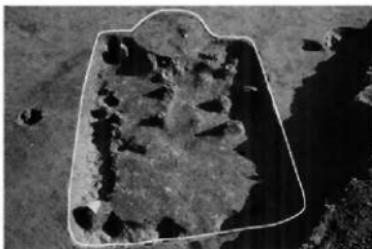
A区西部の遺構群



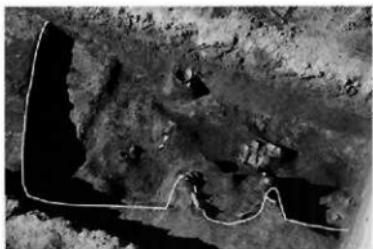
1号竪穴住居跡



1号竪穴住居跡カマド遺物出土状況



2号竪穴住居跡カマド遺物出土状況

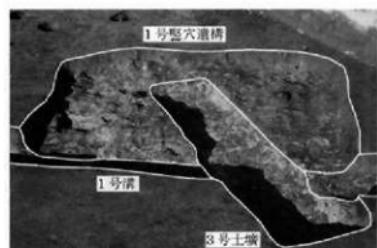


3号竪穴住居跡遺物出土状況

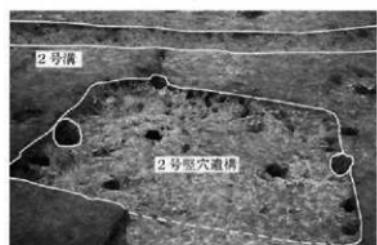


3号竪穴住居跡カマド遺物出土状況

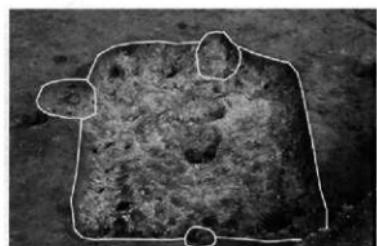
図版2



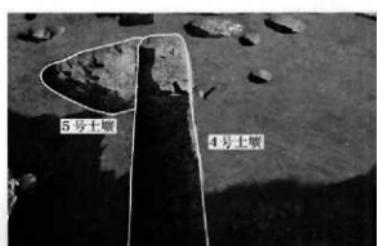
1号竖穴造構・1号溝・3号土壤（西方より）



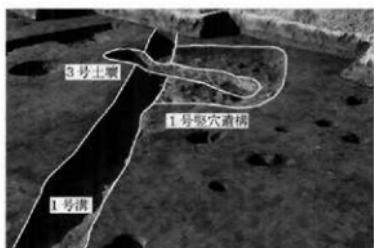
2号竖穴造構



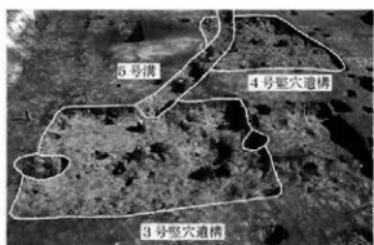
5号竖穴造構



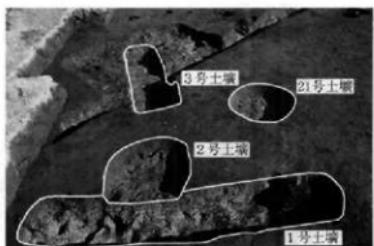
4・5号土壤



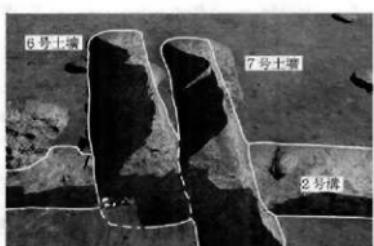
1号竖穴造構・1号溝・3号土壤（南方より）



3・4号竖穴造構

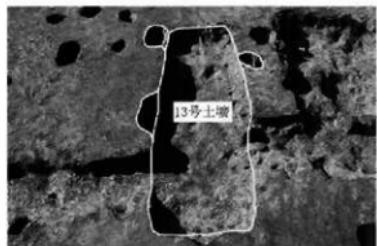


1～3・21号土壤



6・7号土壤・2号溝

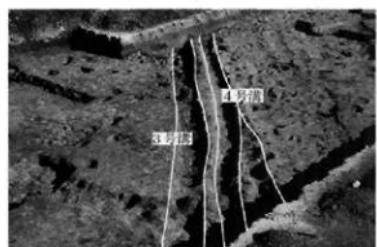
図版3



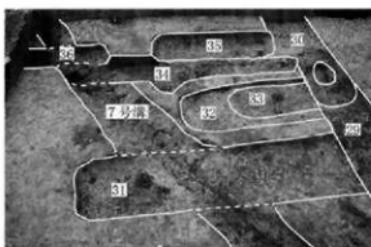
13号土壇



2号溝跡



3・4号溝



C区土壤群と7号溝

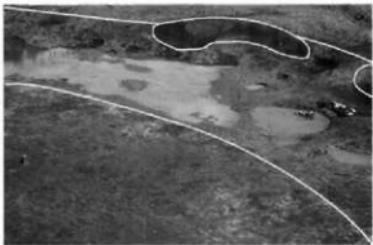


お手長山古墳現況

図版4



周溝完掘状況（西方より・昭和63年度）



周溝完掘状況（北方より・昭和63年度）



第1トレンチ（南方より）



第2トレンチ（北方より）



第3トレンチ（北方より）



第3トレンチ突出部確認状況（東方より）

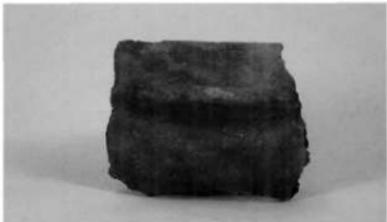


第3トレンチ突出部確認状況（西方より）

図版 5



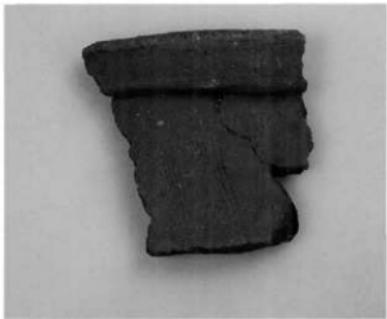
1号住居跡 (No.1)



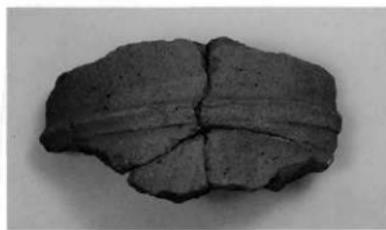
1号住居跡 (No.3)



1号住居跡 (No.12)



1号住居跡 (No.15)



1号住居跡 (No.16)



1号住居跡 (No.14)



1号住居跡 (No.20)



1号住居跡 (No.24)

図版 6



2号住居跡 (No.1)



2号住居跡 (No.7)



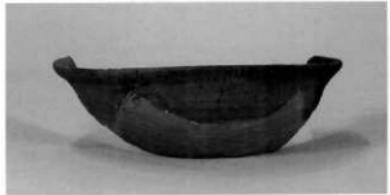
2号住居跡 (No.8)



2号住居跡 (No.9)



3号住居跡 (No.1)



3号住居跡 (No.2)



3号住居跡 (No.8)



3号住居跡 (No.8・内面の線刻)



3号住居跡 (No.9)



3号住居跡 (No.10)

図版 7



お手長山古墳周溝出土遺物 (No.10)



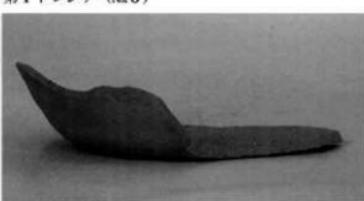
お手長山古墳周溝出土遺物 (No.11)



お手長山古墳周溝出土遺物 (No.12)



第1トレンチ (No.8)



第2トレンチ (No.2)



第2トレンチ (No.3)



第2トレンチ (No.6)

報告書抄録

ふりがな	（ふりがな）立堀地区（たてぼり くじゆ）（地図）（地図）（地図）（地図）（地図）（地図）（地図）（地図）							
書名	熊野遺跡（立堀地区的調査）・お手長山古墳（発掘調査／確認調査）							
副書名								
シリーズ	深谷市教育委員会埋蔵文化財調査報告書							
巻次	第83集							
編著者名	鳥羽政之							
編集機関	深谷市教育委員会							
所在地	〒366-0823 埼玉県深谷市本住町17-3番地 TEL 048(572)9581							
発行日	平成19年2月28日							
所収遺跡	所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
立堀地区	市町村	通路						
立堀地区 熊野遺跡 (立堀地区)	埼玉県深谷市岡 2003番地	11405	17	36° 14' 03"	139° 12' 53"	平成2年11月1日から 平成2年12月27日まで	A区859m <sup>2</sup> B区148m <sup>2</sup> C区75m <sup>2</sup> 計1,672m <sup>2</sup>	工場建設
立堀地区 お手長山古墳 （立堀地区） 発掘調査	埼玉県深谷市岡 2007-4番地	11405	18	36° 12' 51"	139° 14' 03"	昭和63年5月1日から 昭和63年5月15日まで	487m <sup>2</sup>	個人住宅
立堀地区 お手長山古墳 （立堀地区） 確認調査	埼玉県深谷市岡 2003番地ほか	11405	18	*	*	平成2年11月1日から 平成2年12月27日まで	95m <sup>2</sup>	範囲確認
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
立堀地区 熊野遺跡 (立堀地区)	集落跡	奈良～ 中世	竪穴住居跡 竪穴遺構 土壙 溝跡	土師器 須恵器 埴輪 かわらけ	A～C地点の調査。竪穴住居跡は いずれも平安時代のものである。竪 穴遺構は、中世に属する。			
立堀地区 お手長山古墳 （立堀地区） 発掘調査	古墳	古墳～ 中世	周溝	土師器 須恵器	後円部周溝の発掘調査。			
立堀地区 お手長山古墳 （立堀地区） 確認調査	古墳	古墳～ 中世	周溝	土師器 須恵器	トレンチ3本を設定し墳形を確認し た。この調査により全長49.5mの帆 立貝式古墳であることが判明した。			

熊野遺跡（立堀地区）  
お手長山古墳（発掘調査/確認調査）

2007年2月28日

編集発行 深谷市教育委員会

埼玉県深谷市木住町17-3番地